
Re:FRain Online

本知そら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Re..FRain Online

【Nコード】

N6577Y

【作者名】

本知そら

【あらすじ】

同時接続者数国内最多を誇る純国産MMORPG『FRain Online』。

サービスインしてから十年が経った今なおトップに君臨し続けるそのゲームを運営するRinged World社が、数年振りの新作を発表する。

その名は『Re..FRain Online』。
同社及び国内初のVR対応MMORPGである。

そのオープンベータテストに参加することになった主人公の遠近とおちかけい

圭は、とあることから通常のPCとは違う『nNPC』としてプレイすることになる。

妹の桔梗ききょうや、いとこの比与森千沙都ひよもりちさとと共に冒険を始めた圭は、高精細なグラフィックと五感を刺激する新感覚に感動しながら、ゲームにのめり込んでいく。

しかし、それは突如、圭の身にだけ降りかかった。

これは、とあるVRMMORPGでただ一人ログアウト不能となった少年の物語である。

プロローグ

……。

いつから私はここにいるのだろう。

数ヶ月前だったような気がするし、数時間前だったような気がする。

何も見えない、何も感じないこの真っ暗な場所は、私の時間の感覚を壊していく。

いや、時間の感覚だけではなく、五感そのものが壊れていく。

どこまでもどこまでも暗闇が続く、その中でただただ漂っているだけの私。

別に無気力だとか諦めたとか、そういうわけでは決してない。

むしろ私は今も、なんとかしてここから出ようと無様に足掻いている。

けれど、私の体は決して動かない。まるで私の体ではないかのよう。

それでも諦めない。だから私は心で叫ぶ。

——誰かそこにいますか？

……。

——誰かそこにいますか？

……。

何も返ってはいない。そこに誰もいないのか、それとも……

——私の声は聞こえますか？

……。

——。

……。

やはり何も返ってこない。けれど私はその先を続ける。

——そこにいるかもしれないあなたへ。

——伝えて下さい。私は生きている、と。

——私はここにいる、と。

……。

——私は戻らないといけない。戻って、会わないといけない人がいるんです。

——だから、お願いします。

——私はここにいます。

……。

……。

暗闇と静寂が私を支配する。

やはり私の声は誰にも届かないのだろうか。

だとしても、

たとえ私の行動に意味がないとしても。

それでも私は、きっといつか、この声があなたに届くと信じて。

今日も私は、この暗闇から叫び続ける。

——そこにいないあなたへ。

——私はこれからもあなたを呼びます。呼び続けます。

——私の声が、いつか届く、その日まで。

——だから、

——いつかここへ来るあなたへ。

——私はここにいます。

第1話 ログイン part 1 (前書き)

(※数字) が付いた語句は、後書きで簡単に説明しています。

第1話 ログイン part 1

「あぢい……」

燦々（さんさん）と光り輝く太陽が、じりじりと俺の体を焦がしていく。

空を見上げれば、雲一つない青い空がどこまでも広がっている。学校の教室や体育館、トイレや廊下にまで空調設備が整った昨今の快適な環境にどっぷりと浸かってしまっている俺達世代には、連日続くこの猛暑は非常につらい。

額に滲んだ汗が頬を伝い、真っ黒なアスファルトへポタリと落ちる。ジュツと短い悲鳴が聞こえて、瞬く間に蒸発してしまった。

これ、肉焼けるんじゃないか？ と、熱にやられ気味の頭で思う。たぶん最近麺類ばかりが食卓に並ぶせいで、脳が肉を欲しているのだろう。

今朝、家を出る前に見た天気予報を思い出す。

『七月二十四日。天気は晴れ。最高気温は三十八度。今日も猛暑日となるでしょう』

視聴者の心のオアシスとなるお天気お姉さんのあの笑顔も、今は酷く憎たらしい。

「うわっ」

持っていた棒付きアイスの最後の一口が、この夏の暑さでドロップアウトする。

……俺だってこんな暑いなか頑張ってたから、少しは根性見せろよ。

平べったい木の棒を手を持ち、アスファルトに横たわる青い氷菓子を見つめる俺。端から見れば、とてもとても哀愁漂う光景だろう。

「なあ、桔梗^{あじさい}。アイスクレ」

悔しいので隣を歩くやたら小さい少女に新しいのをねだる。

「さっきのもう食べたの？」

棒付きアイスを一生懸命に舐めていた少女が小首を傾げて俺を見上げる。

少し目尻が上がり気の強そうな印象を受ける大きな目に、桜色の唇をした小さな口。黒い髪は肩で切り揃えられ、肌は透き通るように白く、手足はほっそりとしている。そして申し訳程度に自己主張する胸に、俺より頭二つ分以上小さい小柄な体。

年相応にうっすらと化粧を施したあどけない少女は、紛う方なき俺、遠近圭とちかきの妹。今年高校生になったばかりの遠近桔梗だ。

「食べたというか、アイスの野郎に根性がなかったというか」

「……どうということ？」

さらに首を傾げる桔梗。妹がなかなか可愛い。

「敵はこの夏の暑さ」

桔梗が振り返り、屍と化した青い氷菓子を目にする。

「溶けちゃったってことか。はい。これで最後だからね？」

桔梗がドライアイスの入ったビニール袋からアイスを取り出す。

「さんくす」

礼を言って受け取り、すぐに包装を引っ剥がして齧り付く。お馴染みのサイダー味が冷たさと共に口の中に広がる。

そういえばと、視線を桔梗に向ける。

大量の紫外線が降り注ぐ太陽の下、ノースリーブの白のブラウスと黒の膝上丈スカートという夏らしい出で立ちの桔梗は、その白い肌を大きく露出していた（主に肩から先）。

「日焼け大丈夫なのか？」

「ふえ？ ……あー」

一瞬桔梗がきよんとするが、すぐに理解して、

「うん。ちゃんと日焼け止め塗ってあるから」

そう言い、「ありがと」と微笑んだ。

「そうか、それなら良かった」

その笑顔に心を癒やされながらも意地悪心が働いた俺は、つい口を滑らせてしまう。

「お前がそのなりでこんがり日焼けしたら小学生にしか見え——」
「あはは、お兄ちゃん。そんなにも晩ご飯に毎日酢の物が食べたいんだ」

「すみませんタコと酸っぱいのは勘弁してください」

若干こめかみの辺りに青筋が見える桔梗にすぐさま頭を下げ、誠意を持って謝罪する。

食卓の全権を桔梗に握られている手前、あまり桔梗を起こらせるのは得策ではない。酢酸とタコはこの世から消えれば良いのに。

自分の姿に多少のコンプレックスを持つ桔梗は、そのコンプレックスの要因である容姿と人柄の良さで学校でもなかなかの人気者で通っている。見た目は小さくて可愛くマスコットのように。けれど成績はいつも上位をキープする頭の良さ。そして困っている人がいれば迷わず手を差し伸べる優しい性格に、趣味は料理と裁縫という家庭的な面も持ち合わせている。いやあ、クラスにこんな子がいたら真っ先に告白してますよ奥さん。

そんな人気者の桔梗は、高校生になってからよくラブレターを貰うらしい。

最初に貰ったのは桔梗が入学して僅か一週間後のことだった。当時「げ、下駄箱に手紙が入ってたっ!？」と酷く動揺した様子の桔梗に、気持ちよく夕寝（晩ご飯前の夕方に寝ること）していたところをたたき起こされたのを覚えている。

最近では週一くらいのペースでラブレターを貰うらしいのだが、それも桔梗の人気を考えれば致し方ない。むしろラブレターを貰ってなかったら「お前らの目は節穴かっ!」と教室まで怒鳴り込んでいるところだ。

ちなみに今のところは色恋沙汰に興味がないようで全て断っている。兄としては、もったいないようなほっとするような、複雑な気分だ。

……とまあ、妹の話はここまでにしよう。シスコンと疑われては困る。

しばらくアイスをガリガリと嚙りながら歩道を歩いていると、大きな日傘を差した大学生くらいの女の人とすれ違った。

すっぽりと影に覆われた彼女を見て、『桔梗も日傘を差せば良いのに』と、ふと思う。

そのまま彼女を目で追い、首がきつくなってきたところで視線を戻す。

隣から強烈な視線を感じることに気付く。

「ん。どうした？」

何故か睨むように俺を見上げる桔梗がぽつりと呟く。

「やっぱりお兄ちゃんも大きい方が良いの……？」

大きい？ ……ああ。そういえばさっきの女の方は胸が大きかった……ような気がする。たぶん。きつと。人自体よりも傘を見ていたから覚えていない。

自分の体にコンプレックスを持つのはみんな同じ。桔梗も、身長以外に女子ならその多くが持つという悩みを抱えていたのか。

よし、ここは兄として励ましてやろう。

「まあまあそう落ち込むな。男全てが大きい物好きというわけじゃないぞ？ なんせ俺は小さい方が好きだからな」

ちよつと自分の性癖をばらしているようで恥ずかしい。

「そ、そうなの？ でもさっきの人じつと見てたけど……」

「あれはお前も日傘差せばいいのになー、と見てただけだよ」

「お、お兄ちゃん……」

桔梗が胸の前で手を合わせて目を輝かせる。妹ながらなかなか愛らしい。

無垢な瞳で見つめられ、気恥ずかしくなってきた俺は、それを隠すようにちよつとぼけてみる。

「……が、すまない妹よ。俺はお前の兄。恋人とかフィアンセとか、そういう甘々な関係にはなれないんだ。法律とか周りの目とか、主

に俺のアイデンティティ的に。だから他に俺と同じ趣向を持つ相手を見つけてくれ」

「――っ！ な、なな、こ、恋人って、お、お兄ちゃんに言ってるのっ！？」

軽い冗談なのに、何故か桔梗は顔を真っ赤にしてドライアイスを投げてきた。

あるえ？ 俺の予想だと『何言ってるのお兄ちゃん。あはははっ』と笑い飛ばされるはずだったのに、どうしてこうなった。理解不能だ。

とりあえず固形物のドライアイスが鼻に当たって涙出そうなんだがどうしよう。

目の前の自動ドアが開き、ひんやりとした空気が体に触れる。はあ、と体内の熱気をはき出すように大きく息を吐くと、幾分かさつきまでより体温が下がったような気がする。

「ふう。すずし〜」

桔梗がブラウスの胸元を摘んでパタパタと風を送る。

「やめとけ桔梗。ここは病院だぞ」

「え？」

桔梗の頭の上に疑問符が浮かんでいるように見えたが、そんなものは無視して真剣な表情で言い切る。

「お前のその不必要な行動で病院側が意図しない気流が生まれ、院内感染が拡大したらどうする？」

お手軽簡単バイオハザード。そんなことで感染したら今頃人類は滅亡している。

「う、うん。分かった」

人を疑うことを知らない桔梗は、ぎこちなく頷きブラウスから手を離す。

……ふう。これでよし。

心の中で安堵のため息をつく。

兄にチラリズムは止めてくれ。いろいろと毒だ。

「そういえばお兄ちゃん。同意書は持ってきた？」

「ああ。ちゃんと持ってきてるよ」

ポリエステル製のショルダーバッグから数枚の紙を取り出す。

「サインはした？ 判子も押してきた？」

「お前は俺の母親か。そんなに心配なら見てみろよ」

同意書を渡すと、桔梗はすぐさま目を走らせる。

「うん。大丈夫そう」

同意書を俺に返す。一応大事な書類なので仕舞っておこうと鞆に手を伸ばす。

「じゃ、いこっか」

しかしその手が鞆に到着することなく桔梗の手に掴まり、グイッと引っ張られる。

「ちょ、待ってっ」

「早く受付しないとそれだけお兄ちゃんの番が遅くなるんだよ？」

ほら、早く早く」

「分かった。分かったから離せって」

「いーやっ」

急かす桔梗に無理矢理引っ張られ、玄関正面にある端末の前まで来る。俺の代わりにその端末を操作し受付を済ませると、端末から番号の書かれた紙が出てくる。それを受け取り、画面で指示された場所へ向かう。

手を引かれ、前に行く桔梗の背中を見つめながら思案する。

病院についてから明らかに桔梗の歩く速度が上がっている。それほどまでに彼女は『アレ』が待ちきれないのだろうか。まあ俺も少なからず『アレ』には期待しているのだが。

目的の場所までたどり着き、番号の書かれた紙を受付の看護師さんに渡す。

ちょうど混んでいなかった時間のようで、すぐに名前を呼ばれた。診察室へと入ってきた俺と桔梗を見て、「ああ、君たちか」と四十歳くらいと思われる医者が微笑んだ。

「同意書は持ってきたかね？」

「はい」

両親と俺のサインが入った同意書を医者に渡す。

「……大丈夫のようだね。ではすぐに治療を始めるけど、ご両親は来ていないのかね？」

「俺と妹は山間部の方の出身で、こっちの学校に通うために今は親戚の家から通わせて貰っているんです。ここから実家までは結構距離があるし、両親は仕事が忙しいようなので、遠慮して貰いました」「そうか。分かった。まあこの治療は他の治療法よりもリスクが極端に低い。同意書なんて大仰な物を書かせてしまったけど、心配なんてまったくする必要はないから安心してくれ」

同意書には『数万分の一の確率で後遺症が残る可能性があります』云々（うんぬん）等のこれから受ける治療の危険性を訴えていた。とは言えそれは、歩いていて交通事故に遭うくらいの確率だったのだ、まあよほど運が悪くない限りは大丈夫だろうというものだった。それでも医療という物は常に死と背中合わせの業種。万が一のことを考え、同意書という物が必要なのだろう。

医者がカルテに何かを書き込み、それを看護師に渡す。

「では遠近さん、こちらへ」

看護師さんに付き従って診療室を出た。

数日前のことだ。

『タダで健康診断受けられるから行ってきなさい』と、地域の広報誌を見た母さんから電話を受けた俺と桔梗は、渋々遠路はるばる実家近くの病院へとやってきた。

せつかくの夏休みを初日から潰されるなんてと、桔梗と愚痴りつつ一日かけて体の隅々まで検査を行った結果、なんと俺のレントゲンにだけ小さな黒い影が映っていたのだ。

たいしたことではないと思うが、という前置きをしたうえで、一応両親にこのことを話したいという医者の要望により、翌日には仕事を休んだ両親とともに病院を訪れた。桔梗と両親を交えて医者と話をしたところ、この黒い影は俺の年齢からすると、まったく気にしなくても良いものらしいが、完全に陰性と決めつけるに至るものでもなく、心配であれば治療を受けてみてはどうかということだった。もし治療するならと勧めてきたのは、ソーク療法という聞いたことのないものだった。

ソーク療法とは、人の身体を正常な状態へと修復する特殊な液体で満たしたカプセルの中に入って、数日から数ヶ月かけて病気を治療するという最新の治療法だった。この治療法は通常の施術よりも時間はかかるが、後遺症もなく傷も残らないという極力体に負担をかけないというメリットがあり、子供から年配の方まで誰でも受療可能なものらしい。ちょうど夏休みに入ったばかりだったこともあり、心配性な両親は二つ返事で俺にその治療を受けさせることを決めた。

そんなわけで、俺は今日からその治療を受けるために、学校近くにある有名な病院へとやってきた。健康診断を受けた地元の病院ではソーク療法は受けられず、紹介されたのがこの病院だった。

『お兄ちゃんのことを心配だから』

そう言って付いてきた桔梗だが、本音は別の所にある。

それは……

「はい、桔梗ちゃん。頼まれていたものよ」

「あ、ありがとうございます！」

嬉しそうに看護師さんから受け取ったのは、最新型のヘッドマウントディスプレイ（※1）と一枚のメモ用紙だった。

俺は大きいため息をついて、ヘッドマウントディスプレイを抱きしめる桔梗に視線を向ける。

桔梗が抱きしめるヘッドマウントディスプレイは従来のただ映像を見るためのものとは少し形状が違い、より薄型で、より頭に密着するような構造になっているようだった。また電極パッドのようなものがいくつもあり、コードでヘッドマウントディスプレイと繋がっている。

あれがVR（※2）対応のヘッドマウントディスプレイか。実物を見るのは初めてだ。あの電極を頭部や首筋に張ることで、その電極が脳波を受け取り、また電波信号を送ることで、ヘッドマウントディスプレイ自体から得られる情報と合わせ、仮想空間を五感で体験可能とするものらしい。

先月から日本でも市販されるようになったばかりの最新機器であり、かなり高額なため一家に一台とはいかない代物だ。それをこの看護師さんがひよいと貸してくれたのには理由がある。

それは看護師さんから受け取ったもう一方のメモ用紙に書かれている英数字にある。

そこに書かれているのは『Re^ッ・F^{エフ}Rain^{レイ} online^{オンライン}』のオープンベータ参加用シリアスナンバーだ。

『Re^{エフ}・F^{レイ}Rain^{オンライン} online』とは、Ringed World社が現在もサービスを続けている『F^{エフ}Rain^{オンライン} online』の新作であり、同社が初めてVR技術を使用した、五感全てで体感できる新感覚MMORPG（※3）だ。

『F^{エフ}Rain^{レイ} online』はサービインしてから十年たった今でも国内で最も同時接続数の多い純国産MMORPGであり、その高い知名度から、一年前に新作発表会で『Re^{エフ}・F^{レイ}Rain^{オンライン} online』が紹介された際には、国内初のVR対応MMORPGということもあって、それはもう凄い反響を呼んだ。

それから約一年が経過した明日。幾度かのクローズドベータを経て、ついにその新作がオープンベータ（※4）を開始するのだ。

この前、ソーク療法を受けるための事前診断を受けに病院へ来た際に、俺と桔梗は順番待ちの空き時間に、そのオープンベータについて盛り上がっていた。

純国産としては初のVR対応MMORPGであり、またクローズドベータの評判も上々と言うこともあって、俺も桔梗も『Re・FRain online』には並々ならぬ思いを寄せていた。ただ、『Re・FRain online』をプレイするにはVR対応のヘッドマウントディスプレイが必須だった。一般庶民な俺達にそんな高価な代物があるはずもなく、そのせいでクローズドベータもオープンベータも泣く泣く応募を取りやめたのだ。

それでもやっぱりプレイしてみたかった俺達は、近くのネットカフェに通い詰めてでもプレイしようかと話していたところ、ちょうど通りかかったこの看護師さんが、知り合いにRinged World社に勤めている人がいること、そしてその人からVR対応ヘッドマウントディスプレイを貸し出すので、『Re・FRain online』をプレイして感想を聞かせてくれる人を探してほしい、と頼まれていることを俺達に話した。

それに食い付いたのは俺よりも桔梗だった。

『目に入れても痛くないどころか快感です』の妹だが、唯一困ったところがあった。それがこのネットゲ（※5）だった。

元々は、いつも俺にべったりだった桔梗が、『FRain online』をプレイする俺を見て興味を持ち、やり始めたのが最初だった。一度はまると飽きることなく長く続ける質の桔梗は、すっかりネットゲにはまってしまい、以来暇さえあればパソコンに齧り付き、深夜までネットゲをプレイするようになった。俺よりも接続時間

が長くなり、俺よりものめり込んでしまった桔梗をさすがに心配になってきた俺は、何度か桔梗をネットゲから離そうと思ったのだが、成績は下がらないわ友達との付き合いはちゃんと続けているわ親には隠し通すわで、注意するべきところが見当たらず、結局ずるずると今日までできてしまった。

目的の物を受け取った桔梗は、看護師さんに何度もお礼を言ったのちに、
後に、

「それじゃ、私は明日のオープンベータに間に合うよう、家に帰ってこれをセッティングするから、お兄ちゃんも明日ちゃんと遅れずに来てね！」

そう言い残して帰って行ってしまった。

……俺がソーク療法を受け始めるところを見送りもせず帰るとは……。

ちょっと寂しくなった。これから約30日間ほど会えなくなるというのにこの素っ気なさ。案外俺って妹にとってはどうでもいい存在？

ちなみに桔梗が言っていたように、俺も明日からのオープンベータには参加することになっている。

このソーク療法に要する時間は約30日。夏休みのほとんどを使うことになるらしい。その間ずっと俺はカプセルの中で、ただプカプカと浮いているだけらしく、さすがにそれは暇すぎると思うことで、なんと治療中に『Re・FRAIN online』をプレイ出来るようにしてもらった。実は俺の担当医もあの看護師さんの知り合いと友人らしく、せっかくだから兄妹きょうだい一緒にと、桔梗の分とは別に俺用のVR対応機器を用意してくれた。さすがにカプセル内にヘッドマウントディスプレイを持ち込むのは無理なため、特性の電極を使用して五感全てを直接脳に送り込む特別仕様にして、治療中

でも他のプレイヤーと変わらずプレイできるようにしてくれた。

しかも俺には特別な役回りを、そして特別なキャラを使わせてくれるという。

さっき感じた寂しさはどこへやら。俺はうきうきしながら、看護師さんの後について、廊下の角にある部屋へと入っていった。

第1話 ログイン part1（後書き）

※1 ヘッドマウントディスプレイ…略称はHMD。頭部に装着する表示装置。一般的に市販されている物は大画面を体感できるディスプレイとして使用されている。

※2 VR…バーチャルリアリティ。仮想現実。人工的に作り出した映像や音響から、現実感を作り出す技術。

※3 MMORPG…Massively Multiplayer Online Role-Playing Gameの略。多人数同時参加型オンラインRPG。国内産の代表作としてはFinal Fantasy XIなどが挙げられる。

※4 オープンベータ…オープンβとも書く。正式サービス前の負荷テスト等を兼ねて行う、無料でプレイができる期間のこと。ごく一部のしかプレイできないクローズドβとは違い、基本アカウント登録ができれば誰でもプレイ可能。ゲームによってはオープンβからそのまま正式サービスへ移行するものもある。この期間に不具合やバグ、サーバーの初期化等があっても正式サービス期間ではないため基本プレイヤーは文句は言えない。

※5 ネットゲ…ネットゲームのこと。インターネットを介して遠くの人とゲームができる。

第1話 ログイン part 2

やたらでかい試験管のような形をしたカプセルに入ると、ビーという警告音が鳴り響き、それから数秒後に足元からゴポゴポとちよつと粘着質な液体が溢れてきた。水攻めよろしくゆっくりと足から順に、腰、肩、そして頭と水面が上昇していき、やがて頭の先まで液体に浸かる。

浮遊感がして、体が僅かに水中に浮く。それはかなり気持ちよくて、ぼーっとしているとそのまま寝てしまいそうだった。

『どうだい調子は？』

脳に直接医者声が響く。どうやら『Re・FRain Online』をプレイするためにと頭に突き差した電極を介して話しかけているようだ。

閉じていた目を開ける。隣の部屋からガラス越しにこちらを見ている医者と目が合う。

『SFみたいで心拍数が当社比1.5倍です』

ちゃんと手首で脈を測りながら応える。1.5倍自体は適当だ。呼吸のための酸素マスクには外部との連絡用に小型マイクが内蔵されているらしい。俺の声はちゃんと医者に届いたようで、彼は微笑みながら頷いてみせた。

ああ。念のために言っておくが、今の俺は全裸じゃない。一枚ちゃんと羽織っている。残念っ。

『順調そうだね。それなら後は君の自由にしてくれて構わない。そのカプセルの内側にあるボタンを押せばゲームが始まるようになっている。楽しんできてくれたまえ』

そう言い残して、医者は部屋を出て行った。

学校の教室くらいの大きさの部屋に一人取り残される。眠気が少しあったので、一瞬このまま寝てしまってもいいかと思ったが、明日には桔梗と『Re・FRain Online』内で合流する手

筈になっている。すぐにログインできるようにキャラクターを作成しておかないと。桔梗はすねると後が大変だから遅れるわけにいかなかった。

オープンベータ自体は明日からなのだが、俺だけは今日からログインできることになっていた。とはいえ、できるのはキャラクター作成まで。なんでも、最後の調整が必要なので、キャラ作成即プレイができないらしい。俺だけが今日ログインできるのは、そのための限定的な措置らしい。

俺はさっそくゲームを始めてみることにした。医者が言っていたボタンを押すと、ふっと目の前が真っ暗になり、数秒後にRinged World社のロゴが現われた。

なるほど。直接脳に映像が流れ込んで来るから、ゲームを始めるゲーム内の映像しか見えなくなるのか。たぶん、耳や鼻、その他五感全てがそうなるのだろう。

いくつかの企業のロゴが流れ、やがてオープニングムービーが始まった。

二枚の抽象画が現われ、その一方に火が付き、燃えていく。残った方の絵から涙が零れ、そして絵そのものも光の粒となり大地へと降り注ぐ。一度映像が暗転してから、とある賑やかな街の市場の様子が映し出され、活気ある光景が流れる。そして突如戦闘シーン。巨大なゴーレムに立ち向かう五人の人間。一人が片手剣と盾を持ち、敵を引きつけてゴーレムの攻撃を凌ぎ、一人がゴーレムの背後から両手剣を繰り出す。一人は本を片手にゴーレムから距離を置いて魔法を詠唱し、ゴーレムの頭上に巨大な氷の塊を召喚する。一人は一番遠くから魔法を詠唱し、盾を持ったキャラに回復の魔法を発動させる。そして最後の一人はピンツと親指でコインを上へはじき、それを銃で狙いを付け、撃ち出した弾丸で貫いた。

そこでムービーは終わり、視界に大きく『Re..FRain O

n l i n e』のロゴが現われた。

よく動くCGで作られたそのムービーは、この『Re・F R a i n O n l i n e』の創世から現代にまつわる物語だった。

要約すると次のようになる。

遙か古の時代^{いにしえ}、いつの頃から始まったか定かではない神々の争いは、悠久の時を経て、女神ケイレスの勝利で幕を閉じる。長きに渡る戦争で荒れ果てた大地を見たケイレスは、自分達のおかした過ちに気づき、深く後悔し、涙した。やがて女神は自らの命を引き替えにして世界の再生を願った。それから数千年の歳月が過ぎ、神々のいなくなった世界は、豊かな自然に育まれた大地へと再生を果たした。世界は新たに生まれた五種族の人間といくつかの魔族が文明を築き、互いに小競り合いを繰り返しながらも、その繁栄を謳歌していた。しかしそんな平和な世界にも、ゆるやかに、だが着実に、闇の足音が近づいてきていた。

とまあ、こんな感じだ。つまりそこそこ平和だった世界に何かよからぬことが起こるので、それをなんとかしろ、というのが俺達プレイヤーの役目、といったところだろうか。王道だな。

オープニングムービーが終わり、視界が暗転する。しばらく待っているときゃラクター選択画面が出てきた。まだ一キャラも作っていないため、そこには誰もいない。

たしか、話ではこの画面で待っていると……

『もしもし。こんにちは』

話に聞いていた通りに、男の声が聞こえる。

『こ、こんにちは』

ん？ 少し話づらい。それも仕方ないか。口を動かさず、考えるだけで言葉になるなんて初めてのことだ。

頭の中で会話するというのはなかなか難しい。慣れるまで少しばかりそうだ。

『君が遠近君だね？ ようこそ『Re..FRain Online』の世界へ！ アンドこの度はオープンベータテストにご参加頂き、誠にありがとうございます』

『い、いえ。こちらこそ、妹の分も合わせて二台もVR機を貸して頂いて、ありがとうございます』

最初と最後のテンションが大きく違う。それに動揺しながらこちらも挨拶を返す。

『なんのなんの。聞けば君たちは前作もプレイしてくれていたらしいじゃないですか。しかも調べてみたら、ミッションは全てクリア、クエストもそのほとんどを網羅。君達からなら良い感想が聞けそうで、期待しています』

『あ、はい。期待に応えられるよう頑張ります』

姿は見えないが、お互いがペコペコと頭を下げる姿が思い浮かぶ。

『さて、話はこれくらいにして、本題に入りましょうか。以前に話してある通り、君にはこの『Re..FRain Online』のストーリーに深く関わる『ミッション』の重要人物となっております。そのため、特別仕様のキャラクターを使ってもらわけですが……この場合、『Re..FRain Online』の売りでもある多彩なキャラクターエディットができず、あらかじめこちらが用意したキャラクターになります。それでもよろしいですか？』

『はい』

別に普通に始めたいのであれば、正式サービスの折に新しく作れば良い。せっかくの特別仕様というキャラを使う機会を逃す手はない。それにしても、ミッションの重要人物か。特別な役回りとは聞いていたけど、まさかそんな重要な役とは……。今から楽しみだ。

『分かりました。ではキャラクターの名前、そしてセカンドクラスを決めて下さい。それ以外の項目は既に決まっていますので』

名前か……。よし、せっかくだから、

『じゃあ名前はブロン——（※1）』

『申し訳ないですが、真面目にお願いします』

うぐっ。なぜこの三文字でネタだと分かったのか。まあそこそこ有名だったから社員も把握していたのかもしれない。

『済みません。ではトウヤで』

この名前は俺が『F R a i n O n l i n e』をプレイしていたときに使っていたものだ。慣れ親しんだ名前であり、これならネタでもなんでもないからスルツと通るだろう。

しかし、

『言い忘れていましたが、君が使用することになるキャラクターは『少女』です。なのでそれに合った名前をお願いします』

『なっ……!?!?』

し、少女だと……っ!?!?

なんてことだ。今まで男のキャラクターでしかやってこなかった硬派な俺が、まさか少女のキャラクターを使うことになるとは……。

『じゃあサイカで』

『サイカ、ですね。分かりました』

予め決めていた名前を告げる。いや別に『今回は少女のキャラクターでやってみようかな』なんて軟派なことを考えていたわけではない。偶然だ偶然。偶然ネットで情報を集めていたら、『R e .. F R a i n O n l i n e』のキャラクターの画像を見つけて、それがやけに可愛くて、気付いたらそれに合う名前を探していただけだ。

『では次にセカンドクラスを決めて下さい』

セカンドクラスとは、たしか『R e .. F R a i n O n l i n e』の職業システム『ツインシステム』に関わるものであり、通常使用するファーストクラス以外にも一つクラスを指定して、場面によってファーストとセカンドをチェンジできるというものだ。「後衛ばかりでアタッカーと盾はどうしよう」とか、「前衛ばかりで回復と支援はどうしよう」というお悩みの時に、セカンドクラスにチェンジすることで、スムーズにゲームが進行できるというものらしい。ただし、もちろんセカンドというくらいだからいろいろと制約があ

るらしく、ファーストとして使用したときよりも性能は落ちるのだとか。まあつまりは『非常時用』のクラス、といったところだ。

『ファーストクラスはギャンブラーです。また、セカンドクラスに同じ系統のクラスは選べません』

ずらっと並ぶクラスからセカンドクラスをどれにしようかと思ひ悩む。

防御力が高く、パーティの盾となる通称『盾職』のパラディン、ディフェンダー、ラウンダー。

攻撃力が高く、パーティの重要なダメージソースとなる通称『近接職』のダークナイト、バーサーカー、ローグ、フォロワーと『遠隔職』のアーチャー、ウィザード。

自分やパーティの能力を底上げする通称『支援職』のミンストレル、ギャンブラー。

自分やパーティのHPを回復し、ある程度の支援もこなす通称『回復職』のプリースト、アルケミスト、マテリアライザー。

いつもは回復職で初め、その後近接や遠隔の攻撃職に手を伸ばす俺なのだが、今回は今までやったことのない支援職らしい。

『ギャンブラー。特殊なコインを使用して様々な効果を付与する支援職。武器は片手剣と短銃が装備可能であり、自身の支援効果を合わせると攻撃職に迫るダメージをたたき出す』か。

ミンストレルが回復職寄りの支援職とすると、ギャンブラーは遠隔職寄りの支援職といったところだろう。

立ち回りによってはサブアタッカーになれる。うん。いいかもしれないな。

『ちなみにここだけの話ですが、ギャンブラーのセカンドにはウィザードかアルケミストがお勧めです』

『ほうほう……』

関係者がお勧めということは……何か隠し性能的なものがある？

ここは素直に従っておいた方が良さそうだ。

『ではウィザードで』

『ウィザードですね。では確認します。名前は、サイカ。クラスはファーストがギャンブラー、セカンドがウィザード。吸血鬼の少女でカメリア皇国からスタート。これでよろしいですか？』

『はい』

後半が初耳だが、そこは仕方ない。

『それでは今日はここまでになります。特別仕様等についてはログイン後のシステムヘルプに記載していますので、そちらをご覧ください、それでも何か質問等あればGM（※2）までご連絡下さい。君については私が担当することになっていますから、出来る限り私が対応します。では、オープンベータの開始は、明日の午前9時からとなります。新感覚VR対応MMORPGを存分にお楽しみ下さい！』

そこで映像がプツツと途切れ、現実世界へと戻る。液体に満たされたやたらでかい試験管の中にいる俺の姿が、透明なガラスにうつすらと映っている。

結局キャラを作成しただけで、特別仕様とやらについては何も聞けなかった。ってそれどころか自分のキャラがどういうものかさえ見ていない。ずっと誰もいないキャラクター選択画面でさっきの人と話していただけたのだから。

まあいいや。これはオープンベータなのであって本番ではない。あまりに気に入らなければ、正式サービスで作り直せば済むこと。

とりあえずは最低でもオープンベータの間は今のキャラでやってみるか。

明日のオープンベータ開始まであと丸一日。

よし、寝とくか。

やることもないので、この気持ちいい浮遊感に任せて眠りに付いた。

そして翌日。

9時になると同時にゲームを開始した。昨日同様にRinged World社のロゴと『Re・Fra in Online』のタイトル画面を経てキャラクター選択画面が現われる。

ところで昨日知ったのだが、このソーク療法という奴はなかなか凄い。何が凄いかと言うと、この液体に浸かっているとご飯は食べなくていいしトイレにも行かなくて良いのだ。医者が詳しく説明しているときに寝ていたので分からないが、どうもこの液体自体に人間が生きていく上で必要な栄養素が溶け込んでいるらしく、それを体が無意識に摂取するため、食事を取る必要はなく、また老廃物も発生しないためトイレに行く必要がないのだそうだ。

つまり、だ。このソーク療法を受けている間は、合法的に両親や親戚、その他の方々に遠慮することなくゲームに打ち込めるのだ。

これはとても凄いことだ。桔梗とは違い両親や親戚にネトゲをしていることがばれている俺にとって、「あんたゲームばかりやってないで勉強しなさい」と小言を言われないか、とか「圭、もしかして友達いないの?」と心配されないか、等と周りの顔色を窺う必要のないこの環境はパラダイスと言える。ただ一つだけ、夏休みの残り数日で宿題を全て終わらせなければならぬという問題があるのだが……まあ未来のことは考えないようにしよう。

昨日と同じように、選択画面にキャラクターの姿はなかった。ただ、誰もいない台座の下に『サイカ ギャンブラーLV1』と書かれている。

特別仕様のキャラだから表示できないのだろうか。まあ、たいしたことではないので気にせず『サイカ』を選択してゲームを始め

る。

視界が暗転。数秒して眩い光に包まれる。光が少しずつ小さくなっていき、それが太陽だと分かったのはムービーが始まってからだった。

『ウルニア大陸の南東に位置する古の都、カメラリア王国。』

吸血鬼の王女によって統治されたこの国は、世界でも類を見ない豊富な地下資源の恩恵を受け、近年では有数の資産国家として知られている。

カメラリアの人口の9割を占める吸血鬼は、自然を愛する温和な性格をしている。そのため、カメラリアは隣国と一定の距離を置き、半鎖国状態とすることで、長きに渡り平穏と平和を手に行っていた。

しかし時代は移ろい行くもの。不変を望むカメラリアは次第に他国から後れを取り、やがてその領土を我が物にせんとする隣国から狙われることとなる。

それでも国民は不変を望んだ。すぐ傍にまで敵の手が伸びているとも知らずに……。

君はその古の地に降り立った、新たな希望だ。

さあ、我々の希望よ。その輝きをくすませることなく、この地を眩い光で満たしてくれ』

緑が多く残る静かで平和そうな町並みをバックに、文字が浮かび上がっては消えていく。

それにしても、やっぱり初プレイはテンション上がってくるなあ。選択した所属国家によってこのオープンングムービーは違うだろうから、全部見たくなってしまう。

だがそれを実行すると、桔梗を待たせてしまうことになる。ムービーはまた今度見るとしよう。

オープンングムービーが終わり、再び視界が暗転。気付いたときには、鬱蒼とした森の中にいた。

……おかしい。周りに人がいない。

周囲の様子に首を捻る。

オープンベータ開始当日、しかも開始して数分だ。普通だったら俺が立っている付近に、ログインしたプレイヤーがあれよあれよと湧いてきてもおかしくないはずだ。

まさかログインサーバーが混んでいる、もしくは落ちている（※3）とか？　ありえる。なんせ日本で一番売れたMMOの続編のオープンベータ。混雑することぐらい赤ちゃんでも分かることだ。

ってことは、もしかすると桔梗もまだログインできてな――

『お兄ちゃんどこにいるの？』

突然頭の中に声が響く。見回しても周りには誰もいない。当人同士にしか聞こえない『テル（※4）』のようだ。

聞こえたのは少し年上の女性の声だった。視界の左下に映る半透明のウィンドウに『ミナト』という名前が見える。知らない名前だ。しかし俺のことを『お兄ちゃん』と呼ぶのはアイツしかないない。

『桔梗か？』

『Re・FRAIN Online』内で現実の声が聞こえることはない。ボイスチェンジャーを通して、そのキャラに合った声が再生されるようになってる。これは個人情報的な理由もあるが、一番の理由は、男が女のキャラを、女が男のキャラを使った時に、

外見とはかけ離れた異性の声が聞こえることを避けるためだ。

可憐な少女から野太い男の声が聞こえても困るだろ？

『うん。ってお兄ちゃんその声どうしたの！？』

桔梗が俺の可愛い声に驚いている。そりゃ驚くか。俺は今まで男のキャラしか使ってたのだから。実際俺も少なからず自分が発した甲高い声に驚いている。

『特別仕様のキャラを使わせて貰えることになったのは知ってるだろ？ それでこうなったんだよ』

『そ、そっか。そういえばそんなこと言ってたね』

……テンション上がりすぎて忘れてたな？

『お兄ちゃんのキャラも見てみたいし、早く合流したいんだけど……お兄ちゃん、カメラアから始めたよね？』

『ああ。って、なんで知ってるんだよ？ というかその前に、なんでこのキャラが俺って分かったんだよ』

『サイカ』という名前は桔梗に教えていなかった。

『フレンドリスト（※5）、FR（※6）から引き継ぎだよ？』

フレンドリスト、か。なるほど。それなら納得だ。

『唯一の引き継ぎ要素のフレリストがさっそく役に立つとは……。知らないだらってバカにしていたのを取り消さないとな』

『そうだね。まさかこんなことになるなんて思わなかったよ』

兄妹だからいつでも連絡が取れる。そう思っていたからな。

『……ところで桔梗。フレリストってどうやってみるんだ？』

『はあ……』

ミナトのため息が聞こえる。

『公式サイトのチュートリアル見た？』

『さっぱり』

『もう……。武器をしまつてスタンバイモードの状態で両手を前に出してメニュー開いて』

『武器？ 武器なんて持ってないぞ？』

俺の手には何も握られていない。

『じゃあそのまま両手を前に出して』

桔梗に言われたとおりに両手を前に出す。すると目の前に半透明のキーボードとメニュー画面が現れた。

おい。SFみたいでなんか格好いい。

『キーボードは何か文字を打つ必要があるときに使って、メニュー操作自体はメニュー画面を直接触ればいいから』

『分かった』

メニューの一覧から『フレンドリスト』を選択する。新しいウィンドウが開き、そこにオンライン（※7）になっていることを示す明るい白文字で書かれた桔梗の名前を見つける。

『桔梗 ミナト カメリア近郊』

たしかに今話している『ミナト』は桔梗のようだ。……ん？ 桔梗の名前の下にもう一人白文字の人、つまりRF（※8）にログインしている人がいる。

『千沙都 チサ カメリア近郊』

千沙都とは、俺の従姉妹（従姉妹）で桔梗の同級生であり、重度のネットゲブレイヤーの比与森千沙都のことだ。実家が近く、また高校も同じところに通っているせいで今でもよく遊んでいる。主にネット上で。

『千沙都もRFやってるのか』

『うん。今横にいるよ』

そういえば、千沙都はクローズドベータから参加していると言っていたな。ってことはアイツVR対応のヘッドマウントディスプレイを持っていたのか。まったく、娘に甘い親が羨ましい。

『で、お兄ちゃん。今どこ？』

『どこと言われても……森？』

『それぐらいフレリスト見れば分かるから、座標教えてって言うてるのっ』

なんだそういうことか。それならそうと言ってくれれば良いのに。すぐにメニュー画面からマップを開く、現在地を示す緑色のポインターの位置を確認する。

『えーっと……Hー13だな』

『Hー13ね。じゃ、今から千沙都とそっち行くから、動き回らずに待っててね。良い？』

『はいはい』

未だ俺を方向音痴扱いする桔梗に適当に返事する。

たしかに以前にFRのダンジョンでパーティーメンバーと合流しようとして穴に落ちて死んでみんなを困らせたりしたが……あれはもう時効だろ？

【サイカ】 種族…吸血鬼♀ クラス…ギャンブラーLV1

第1話 ログイン part 2（後書き）

※1 ブロン―…ブロントさん。FF XIを代表するナイト。グラットンソードがお気に入り。

※2 GM…ゲームマスター。その名の通りゲームを管理する人のこと。不正行為やセクシャルハラスメントに対して処罰を与える。

※3 落ちる…回線切断のこと。ログインサーバーが落ちた場合、ゲームにログイン不可能となる。すでにログインしているプレイヤーには影響はない。

※4 テル…tell。発信者と受信者にしか聞こえない会話。ゲームによっては『ささやき』『ウィスパ』『対話』等とも言われる。

※5 フレリスト…フレンドリスト。フレンド登録するとお互いのフレンドリストに名前が乗り、ログイン状態や大まかな現在地が分かるようになる（ゲームによって仕様は様々）。

※6 FR…エフアールと読む。前作の『FRain Online』の略。

※7 オンライン…回線がネットに繋がっている状態。ゲーム内でオンラインという場合は、ログインサーバーもしくは各ゲームサーバーにログインしていることを指す。

※8 RF…アールエフと読む。今作の『Re…FRain Online』の略。

第1話 ログイン part 3

さっき道端で拾った小石を手の中で弄り、人差し指でピンツと弾く。放たれた小石は放物線を描き、カチンと音を鳴らして地面に転がっていた赤色の石に当たった。

「おー」

感嘆の声を漏らす。そのまま地面を眺めていると、ふいに視界の端に羽ばたく鳥の姿が映り、それにつられて空を見上げる。

「おおー」

再び感嘆の声を漏らす。

青い空に浮かぶ白い雲は、頬に当たる風と同じ向きに、形を変えながらゆっくりと流れている。この空をファインダーに収めて学校の奴らに見せれば、間違いなく現実の空と見間違ふことだろう。

凄いいりアリティだ。手に持った小石も、頬に当たる風も、現実の感触とまったく変わらない。むしろ現実よりもしつかりと感触を感じるができるので、こっちの方がより現実に近いのでは？ と錯覚してしまうほどだ。

なるほど。このゲームの出来の良さも多分に含まれるだろうが、これだけのリアルさなら、VR機が数十万と高額なもの、それなのに在庫切れするほどの売れ行きなのも頷ける。俺だって金さえあれば迷ふことなく買っていただろう。高校生には到底無理な金額だが「よいしょっと」

足をブラブラとさせて勢いをつけ、大きなキノコから飛び降りる。「っとと。んゝ……本当にファンタジーな世界へ迷い込んだ気分だ」少女のものとしか思えない声が耳のすぐ近くで聞こえる。それは自分の声なのだが、まだ聞き慣れていないせいで他人のもののように思える。

「それにしても、これはモンスターなのか？」

さっきまで座っていたキノコを見上げる。グラフィックが完成さ

れすぎていて、これがただのフィールドのオブジェクトなのか、それともモンスターなのかすら分からない。大抵のモンスターやプレイヤー、NPCなどには頭上に名前と場合によってはHPゲージが表示されるのだが、例外としてこちらがアクションを起こすか、もしくはこちらが近づくまで名前もHPゲージも表示されないものもいる。このキノコの場合、すでに近づくどころか座っているの、後は攻撃してみても反応するかどうかだ。

もしLV^{レベル}の高い敵だったらどうするか……いや、こんな初期のマップに高LVのモンスターが配置されているはずがない。しかし、もし配置されているとすれば、それは完全に運営側の嫌がらせ、トラップだ。そう易々と乗せられて、地面に這いつくばるわけにはいかない。

「とりゃっ」

とか考えつつ、武器がないのでキノコにキックをする。人は好奇心に勝てないのだ。

キノコは大きく左右に揺れた後、ポンツと音と煙を出して消える。さあ、鬼が出るか蛇が出るか……。

《サイカはサクラダケ（※1）を1つ採取した》

「アイテムかよっ！」

いつの間にか手の中にある小さなキノコを握りしめて叫んだ。なんで採取ポイントがあんなでかいキノコなんだよっ。しかも俺は採取なんてしていない。蹴っただけだ。

《サイカの採取LVが1になった！》

しかも難易度の高いアイテムだったようで、採取LVも0から1に上がってしまった。

武器LVよりも採取LVが先に上がるなんて……。

《称号…キノコ狩り名人を手に入れた!》

「狩ってねーよ蹴ったんだよ!」

なんだこの残念な祝福ログの嵐は……。俺は採集系のLVを上げるつもりはないぞ? というよりサクラダケ一つ手に入れただけで名人? 実はこれレアアイテムだったのか?

「……」

名前通り桜色のキノコを見つめる。正直おいしそうには見えない。食用ではなさそうだ。

捨てるのは勿体ないので鞆に仕舞う。あとでNPCか誰かに売りつけてみよう。価値は分からないが小銭にはなるだろう。

そこでふと見下ろした自分の姿に興味を持つ。

そういえば周りにばかり気を取られて、自分のキャラクターを確認していなかった。

さっそくメニュー画面からステータスウィンドウを開き、俺が操作する『サイカ』の全身像を見る。

「うああ……」

口の端からうめき声のようなものが漏れる。

『サイカ』は、俺が思っていた以上に『少女』だった。

絹糸のように細く、サラサラとした長い金髪は後頭部の少し右にずらしたところで纏めて垂らしている。サイドポニーテールというものだろうか。ただ、サイドというほど右には寄っていない。あどけなさの残る大きな瞳は青色と赤色のオッドアイで、薄い唇はうっすらと桜色をしている。その軽く閉じた唇の間からは吸血鬼らしく発達した犬歯がちらちらと覗き見える。肌は透き通るように白く、凹凸の少ない体から伸びた手足はほっそりとしている。

ステータスウィンドウに映し出された『サイカ』を見て、桔梗に似ているなど、ふと思った。髪の色と目の色は大きく違うが、それ以外に類似している点が多いように思える。

「……っ！」

その時、俺はあることに気付いてしまった。それは決して気付いてはいけないことだったのかもしれない。しかし、前述したように人は好奇心に勝てない生き物。大きな背徳感を抱えつつも、俺はそれを実行に移した。

「……なっ!？」

な、なんてことだ……。やはり俺の考えは正しかった。しかしこれは――

「あ、お兄ちゃんいたーっ！」

驚いて声のした方を向く。そこには頭上に『ミナト』と『チサ』と書かれたキャラクターがこちらに向かって走ってきていた。

桔梗は『エルフ』を選んだようだ。桔梗の操作する『ミナト』はモデルのような体型をした長身の銀髪の美少女で、大斧を持っていることからクラスはバーサーカーだろう。

その桔梗の隣にいる千沙都が操作する『チサ』は、黒髪に動物のような大きな耳と尻尾が特徴的な『獣人』を選んでいた。両手剣を持っているので近接職か盾職のどれかのようなのだ。

しかし今の俺にそれを詮索する余裕はない。俺はこの衝撃の事実を桔梗に伝えねばならないのだ。

「大変だ桔梗！」

俺は声を張り上げた。

「なに、どうしたの？」

耳に手を当てて聞き返す桔梗に、俺はさらに声量を上げる。

「このキャラ、見た目桔梗に似てるのに、桔梗よりずっと胸があー
ー！」

「それ以上ゆうなあああー!!」

《ミナトはブラストストライク（※2）》を発動!》

「ぎゃあああー!!」

桔梗が振り下ろした重量感たっぷりの大斧の一撃を受けた俺は、
強い衝撃とともに後方へと吹き飛ばされた。

……というかこれ、バトルスキル(※3)じゃないか！

「いたた……。ちょっと待て！ PK(※4)はだめだろ！？」

「セクハラの方がだめだと思うけどっ！？」

桔梗が息を荒くして、大斧を肩に担ぎ、地面に倒れた俺の頭上に立つ。ちなみにPKとはプレイヤーキリングのことで、プレイヤーが別のプレイヤーを攻撃することを言う。

「それにPK宣言してないから、ただ吹き飛んだだけでしょ？」

RFではPKをする場合、一方がPK宣言し、もう一方がそれを受けない限りは成立しないようになっている。たしかに桔梗の言うとおり、俺のHPは減っていない。

「それでもこのリアルさのせいでダメージを受けた気がする……」

よろよろと立ち上がって桔梗と千沙都を見上げる。

……ん？ 見上げる？

「なんで二人ともそんなに身長が高いんだ？ 特に桔梗。お前高すぎだろ」

頭三つ分以上高い桔梗を見て言う。まるで俺と桔梗の立場が逆転したかのようだ。

「そ、そう？ 別にそんなことはないと思う。……た、たしかにすこし身長高めにはしたけど」

すこし？ いや思いつきりだろ。むしろ身長のパラメーター最大だろ。……ああ、そうか。これが桔梗の理想ってわけか。泣けるっ。

全て理解した俺が慈しみを込めた優しい声で「仮想の世界だけでも理想的な自分でいたいよな」と言うと、何故か桔梗は顔を真っ赤にして再びブラストストライクを決めるのだった。

【サイカ】 種族…吸血鬼♀ クラス…ギャンプラーLV1

採集…採取LV1

【ミナト】種族…エルフ♀ クラス…バーサーカーLV1

【チサ】種族…獣人♀ クラス…ラウンダーLV1

第1話 ログイン part 3 (後書き)

※1 サクラダケ…桜色をしたキノコ。見た目はアレだが味は格別。また染色の素材となる。レア度B。

※2 ブラストストライク…両手武器専用バトルスキル。大きく振りかぶった武器を地面へ叩き付け、範囲ダメージを与える。攻撃力B。

※3 バトルスキル…戦闘時に使用するスキル。技のこと。

※4 PK…ピーケー。プレイヤーキリング。プレイヤーとプレイヤーが闘うこと。RFでは基本PK不可である。

第1話 ログイン part 4

「あ、あやうく初めて戦闘不能にされた相手が妹になるところだったぜ……」

「だからPK宣言してないって言ってるのに……」

別に血も出てない口元を拭いながらゆっくりと立ち上がる。そんな俺を桔梗がめんどくさそうに見つめている。

顔の細かい表情まで再現とは……開発の人、本気出し過ぎだろ。

「で、桔梗。単なるエルフというキャラクターへの好奇心なんだが、そのミナトの身長はパラメーター最大——」

「せ、背の高さのことですが、ちさ達よりも圭さんが小さいんだと思うです」

聞き慣れた残念系口調の千沙都が、俺の声を遮って話に割って入ってきた。

「俺が？ まあたしかに低すぎるとは思うが……。それはそうとして、身長とその体型——」

「エルフはそういう仕様なのです。パラメーターを弄らなかったらこうなるのです」

千沙都が口調を強めながら詰め寄ってくる。視線を上げるとチサの大きな耳がピコピコと動いている。やばい凄い触りたい。

「わ、分かった。千沙都が言うならそういうことにしとく」

こっそり後で確認しておくか。

「さすが圭さん。落ちた物を五秒以内に拾って食べてもお腹壊さない人は格が違います」

「俺は三秒ルール派だ」

千沙都の褒め言葉は相変わらず分かりづらい。

横を見ると桔梗がほっとため息をついていた。話がそれて安心しているようだ。

「ところで、圭さんは吸血鬼のギャンブラーなのです。また凄い

種族とクラスを選んだですね」

「凄いて、なにがだ？」

よく見れば千沙都は、背中に両手剣の他に中型の盾を背負っていた。序盤からこの二つを装備できるのは全クラス中、最も装備できる武器の種類が多い『ラウンダー（※1）』しかない。

「ギャンブラーって全クラス中最もお金かかるのですよ？ 武器として使う銃の弾も支援効果を付与するコインも、吸血鬼特有の種族スキル、『血の循環』を発動するのに必要な血液も、どれも消費アイテムです」

「……マジですか」

M M O R P Gで金といえばLV、そしてレア装備の次に重要な要素と言っても良い項目だ。千沙都が言うには、ギャンブラーとはそのとても大事な金を湯水のように消費するクラスなのだという。

「はい。クローズドベータ（※2）の時は『道楽クラス』と言われていたです」

道楽クラス……つまり、お金に余裕のあるプレイヤーが、メインに育てていたキャラとは別に新しくキャラクターを作成して気晴らしにプレイする、暇つぶしの的なクラスだということだ。

「使いこなせばかなり強いんですが、クローズドベータでは誰もそこまでいかなかったです」

大器晩成、ということなのか？ とにかく、最初にプレイする時に選ぶようなクラスではないことはたしかのようだ。

「たぶん育てるの苦労しますよお」

千沙都^{チサ}がニヤニヤと笑う。

「と言われても、元々このキャラは俺が作ったんじゃないくて、運営の人が特別仕様だと言って用意してくれたものだから……よし、LV上げに苦労したら苦情を書いてやろう」

俺がそう言うと、笑っていた千沙都の（チサ）の動きがピタリと止まった。

「運営……もしかしてそれって噂の『nNPC』のことですか？」

「エヌツーピーシー？ なにそれ？」

「『NPCではないNPC』という意味らしいです。ネットで噂になってたです。どうもRinged World社の社員がリークしたようなのですが」

そう前置きをして、千沙都はnNPCとやらについて話し始めた。「FRのミッション（※3）って面白いと評判は良かったのですが、プレイヤーがないがしろにされているという不満も大きかったです。正直ちさもそう思っていました。一応ストーリーとしては重要な立ち位置にいるプレイヤーなのですが、どこかNPCと距離があり、疎外感がありました。そのせいでちさにはミッションを心から楽しむことができませんでした」

たしかに千沙都が言うように、俺も前作のFRで同様の思いを感じていた。せっかく盛り上がってきたところなのにプレイヤーは脇役の雑魚を相手にさせられたり、戦闘に勝手に参加してきたNPCが強すぎてプレイヤーはただNPCを後ろから見守るだけだったり、「○○のアイテムを取ってこい」と世界中を走り回らされたりと、プレイヤーはNPCに良いように使われただけの、所謂『パシリ君』だったように思える。

「そこでRFではそう言った意見も取り入れ、ミッションに深く関わるNPCの中から、特に重要なNPC一名がちさ達プレイヤーとパーティを組み、一緒に戦い、出来うる限りプレイヤーと行動を共にさせることで、VR対応ということも合わせて、前作以上の臨場感をプレイヤーに与えよう、というものらしいのです」

千沙都の話を静かに聞いていた桔梗が口を開く。

「へえ。でもそれだと、そのnNPCっていうのは結局プレイヤーのように動くけどNPCだってことじゃないのかな？」

「はい。nNPCには特別なAIを搭載してプレイヤーに近づけるようなのですが……ネットの噂ではまだそのAIが完成していないようで、今のところは実際に運営の誰か、おそらくバイト君が動かすことになる、と言われているです。これが事実だとすると、その

nNPCの中の一体を、圭さんが操作している、ということになるです」

「なるほど。それで特別仕様のキャラクターなわけだな」

nNPCとしてミッションに関わる重要なキャラクターだから、予め見た目や種族、クラスが決まっていた、というわけか。

「実際、吸血鬼のキャラクターエディットには、オッドアイはあっても赤と青のオッドアイはなかったはずですよ。特別仕様なのは間違いないです」

そう言われると、途端に『サイカ』が凄いキャラクターに見えてきた。すいません、道楽クラスだとか言って。

ん……？ でも待てよ。俺のキャラクターがミッションの重要人物だとして、プレイヤーのみなさんのミッションに参加するとする。ここまでは良い。だが、クエストは人によってはまったく手を付けなかったり、後からまとめてやったり、実装されたらすぐに攻略したりと、プレイヤーによってその進行度合いに大きく差が出る。その辺りはどうするのだろう。

「なあ、千沙都」

「はい。なんですか？」

「俺がそのnNPCだとして、千沙都と桔梗のミッションに同行するとする。この場合、千沙都と桔梗のミッションは進行するわけだが、それ以外の人はどうするんだ？ まさか俺が全てのプレイヤーについていくのか？」

俺がそう質問すると、千沙都は顎に手をあてて「んー」と唸った。「……ああ、それについても書いてあったです。nNPCとして存在するのは基本的に各国に一名ずつ。それを『オリジナルnNPC』と呼ぶそうですが、さっき圭さんが言ったみたいに、ちさ達と圭さんでミッションをクリアした場合。それ以外のプレイヤーには、そのプレイヤー専用のnNPC、これを『クローンnNPC』と呼ぶそうですが、それを連れてミッションを進行することになるのだそうです。クローンnNPCはミッションを進行している時に現れて、

オリジナルnNPCとほぼ同じ行動を取るので、クローンでも遜色なく楽しめるのだそうですよ」

「そうか。俺が全てのプレイヤーを相手する必要はないのか」
ほっと胸を撫で下ろす。

いくら重要な役どころだからと言っても、俺もLV上げやLV上げやLV上げがしたい。キノコ蹴って採取LV上げる以外にも、モンスターを狩ってギャンブラーのLVを上げたい。

あれ、LV上げしか言っていないような……。

そんなことを考えていると、

「ところで、ふと思ったんだけど、そういう重要なことってお兄ちゃんのシステムヘルプ辺りに書いてあるんじゃないの？」

桔梗がそう言って俺に視線を向けた。

……そういえば、

『特別仕様等についてはログイン後のシステムヘルプに記載していますので、そちらをご覧頂き、それでも何か質問等あればGMまでご連絡下さい』

昨日の運営の人の言葉を思い出した。

慌ててメニュー画面を操作して、システムヘルプウィンドウを開く。

項目に目を走らせていくと、さっき聞いたばかりの単語が目に入った。

『nNPCについて』

「……あった」

「やっぱり……」

頭を押さえた桔梗は、今日一番のためいきをついた。

第1話 ログイン part 4 (後書き)

※1 ラウンダー…両手剣、鎌、片手剣、短剣、弓、中型盾を装備可能なクラス。中型盾を装備すれば盾職。両手剣、鎌を装備すれば近接職。弓を装備すれば遠隔職と、どんな立ち位置もこなす。

※2 クローズドベータ…オープンベータの前に行われる無料でゲームができるテスト運営期間。大抵は抽選を行い、当選した一部のプレイヤーのみがプレイできる限定的なものである。また、ほとんどの場合はゲーム自体もまだまだ未完成のことが多い。

※3 ミッション…通常のクエストとは違い、ゲームの物語に大きく関わる重要なクエストのこと。

第1話 ログイン part 5

「で、お兄ちゃん、どこまで読んだの？」

モンスターがドロップした木の枝に火打石で火を付け、これまたモンスターがドロップした羊の肉を大斧の刃先に載せて焼く桔梗。妹よ、いつからそんなにアウトドアになった。

「あと少しで一通り目を通すといったところ」

システムヘルプに目を走らせつつ応える。

千沙都がネットで仕入れた情報は、その全てが怖くなるほどに合っていた。本当に関係者が情報をネット上へリークしたのかもしれない。

システムヘルプに書かれていたことをまとめると、次のようになる。

『サイカ』はカメラリア皇国のミッションで最も重要なキャラクターであり、プレイヤーと行動を共にする『nNPC』である。その『nNPC』であるサイカは、通常は他のプレイヤーと何も変わらず普通にプレイすることができるが、ミッションが開始されると、『サイカ』はプレイヤーではなくnNPCとしてミッションに参加することになる。ミッションのイベント中は操作不能となり、イベントに沿って勝手に喋り、勝手に動き、ミッションのNPCの一員として行動する。イベント以外はプレイヤー自身が操作することができる、さらにミッション限定で特殊なバトルスキルや、クラススキルが使用可能となる。また、プレイヤーはnNPCがクリアした、又はクリア途中のミッションまでしか進行できない。そのため、『サイカ』は早めにミッションを進めること。ミッションをスムーズに進行できるよう、以下の二つのアイテムを特別に支給する。悠久の弾丸、無限のコイン【ランダム】。

……そんな物あったか？

一通り目を通し終えたシステムヘルプを閉じながら思案する。そういえば、サクラダケを鞆に仕舞いはしたが、鞆の中身を見た覚えはなかった。

さっそく鞆の中を漁る。とは言っても、それはアイテムウィンドウを確認するという行為だ。

「あ、あった」

アイテムウィントウの隅の隅。最下段にそれはあった。悠久の弾丸×∞（※1）と無限のコイン【ランダム】×∞（※2）。どちらも数の減らないアイテムのようだ。これでギャンブラーの主力武器『短銃』が弾切れをおこすことはないし、クラススキルのツアッポ（※3）も使い放題だ。ただ、悠久の弾丸は攻撃力が1と低く、無限のコインも効果がランダムで発動するようだから、どちらも常時使えると言うものではない。雑魚狩り用といったところか。まあ、ないよりはマシだろう。

鞆にはその二つ以外にもいくつかアイテムが入っていた。胴装備のヴァンパイアコートに脚装備のヴァンパイアハーフパンツ、腕装備のヴァンパイアグローブに足装備のヴァンパイアロングブーツ。そして片手剣のステイレットと短銃のリボルバー。

武器は良いとして防具の名称はなんなんだ。種族が吸血鬼だからヴァンパイアと付けたくなるのは分かるが、初期装備なんだからシンプルにコートとかグローブでも良かった気がする。どっちでもいいけど。

さっそくそれらを装備する。アイテムウィンドウの横にステータスウィンドウを開き、各装備部位にある四角いマスへ該当するアイテムをドラッグしていく。ステータスウィンドウに映るインナーだけを着たサイカの姿が、右手に短銃、左手に片手剣を持ち、紋様が入った茶色のコートと、白のローライズのハーフパンツ、そして黒のロングブーツを履いた姿へと変わる。個人的にはかなり好みの格好になったのだが……このコート、裾が前から後ろへ少しずつつ長く

なっていくモーニングコートのようなデザインをしていて、さらにローライズのハーフパンツを履いているせいでヘソがちらちらと見えるようになっていて。正直ちよつとエロい。妹にどことなく似ているからなおのことエロい。変態？　いいえ俺は男子としてかなり健全だ。たぶん。

それよりもこのハーフパンツ。全然太もも隠れてねーよ。戦士（戦う者という意味で）なら脚守れよ。まったく、これから世界を救おう（たぶんそんなストーリーなはず）っていう奴がこんなオシャレ装備なんかしやがって……。

見た目良いから許すけど。

最後にステータスウィンドウ下段にある適用ボタンを押す。すると俺の体が一瞬消え、次現われたときにはステータスウィンドウに表示されていたサイカと同じ格好になっていた。

「やっぱり……。ギャンブラーだけ装備がないのはおかしいと思ってたんだよね」

いつの間にか、さっきまで桔梗が焼いていた羊の肉が『マトンのグリル』という食事アイテムに変化していた。桔梗はそれをもつしやもつしやと食べている。

たしか肉料理には攻撃力アップの効果があったはず。手軽に作れる攻撃職用の食事アイテムのようだ。

「俺もまさかとは思ったが、まさか装備されず鞆に仕舞ってあるなんてなあ」

「えー、普通まずは鞆の中に何か入っていないか見るんじゃないの……」

ごもつともです。

ちなみに桔梗と千沙都の二人は近接職なので鎧を着ている。鎧と言っても全身を鉄製のプレートで覆うようなものではなく、要所要所にプレートを配置した比較的軽装の鎧だ。そしてやっぱり二人とも太ももは出ている。だから守れって。

桔梗とやりとりをしていると、突如ファンファーレと派手なエフ

エクトを伴ってシステムログが流れた。

《サイカのLVが5になった!》

「早ええよ! 俺まだ何もしてねーよ!」

システムヘルプを読んで武具を装備しただけでLVが1から5に上がってしまった。

もちろんこれはチートとかそういうものではない。俺がシステムヘルプを読んでいる間、ただ待つのは時間が勿体ないという桔梗と千沙都に、俺を加えた三人でパーティを組み、二人がモンスターを倒して経験値を分けてくれた。そのおかげで何もしていない俺にも経験値が入り、気づいたらこんなLVになっていたというわけだ。

ちなみに今桔梗がここにいるのは、スタンバイモードにして疲労を取るためだ。RFではアクティブモード、つまり武器を構えた状態で敵と戦っていると疲労が溜まっていき、それが一定以上蓄積されるとステータスにマイナスの補正が入るようになっていく。この疲労は、武器を仕舞ってスタンバイモードになり、敵と接触せずスタンバイモードを維持することで取れるようになっていく。このスタンバイモード時にはHPとMP、そして少し時間を置けば状態異常も回復するので、回復職がいない時やソロで狩りをしている時は重宝する。

「さて、俺もそろそろ初戦闘といくか。桔梗、疲労取れたか?」

「うん。ちょうど今全快したところ」

「そんなためしにやってみますか!」

桔梗を連れて千沙都の元へ向かう。

《サイカはリロード(※4)を発動! 短銃に弾が込められた》

走りながら『リロード』を使用する。短銃にもよるが、このリボルバーという武器の場合は6連発仕様のようだ。6発撃つ度に短銃専用スキルの『リロード』を使用しないといけない。忘れて空撃ちなんてかっこ悪いことはこの二人の前では出来ないからな。

「圭さん、もう読み終わったのです?」

モンスターにとどめを差しながら千沙都が振り返る。

「ああ」

「ちょうど良かったです。両手剣のLVがクラスLVに追いついたので、武器を変えたかったところなのです」

そう言うと千沙都は両手剣から片手剣と中型盾に武器を変更した。

「ちさが盾をするので、桔梗と圭さんで敵を削って下さいです」

「りょーかい。あ、HP減ったら下がって回復しろよ。まだコインがこれしかなくて、何が出るか分からん」

俺はツアップを使用する。

《サイカはツアップを発動!》

コインを親指で上空へ弾き、短銃で狙いを付けて撃ち抜く。

《表。効果アップ! パーティメンバーに攻撃力アップの効果》

三人の右手に赤色のエフェクトが現われる。

「わあー。なんか強くなった気がします」

「気がするだけかも」

「気がするんじゃないかって強くなってるんだよ!」

左手の片手剣を持ち直し、アクティブモードにする。

「敵の指定は千沙都に任せる」

どの敵を攻撃するのかは盾職に任せるのが一般的だ。

「はい。それではいきますよー。『ヘイフォレストシープ、いつまでママのスカートに隠れるんだい? (※5)』」

《チサは挑発(※6)を発動! フォレストシープに挑発の効果》

「なんだよその挑発のセリフは!？」

そんなこんなで、RFへ来て初めてのLV上げが始まった。

【サイカ】 種族…吸血鬼♀ クラス…ギャングブラーLV5
採集…採取LV1

【ミナト】 種族…エルフ♀ クラス…バーサーカーLV5

武器..大斧LV4

【チサ】種族..獣人♀ クラス..ラウンダーLV5

武器..片手剣LV0、盾LV0、両手剣LV5

第1話 ログイン part 5 (後書き)

- ※1 悠久の弾丸×∞…銃専用消費アイテム。支給品。トレード不可。売買不可。攻撃力1。
- ※2 無限のコイン【ランダム】×∞…ツアアップ専用消費アイテム。
- ※3 ツアアップ…コインを消費して、自身及びパーティに様々な効果を付与する。ギャングブラー専用クラススキル。
- ※4 リロード…短銃に弾を込める。短銃専用スキル。
- ※5 ヘイ…FFXI クローズドベータより。
- ※6 挑発…パラディン、ディフェンダー、ラウンダー専用スキル。敵一体の攻撃対象を自分に固定する。

第2話 ログアウト不能 part 1

リロードしながら視界の左上に見えるHPとMP、そしてスキルポイント、通称SPのゲージを確認する。敵に攻撃をすることによって貯まり、バトルスキルを発動することによってその全てを解放するSPは、貯まったポイントに比例してバトルスキルの効果を上昇させる効果を持つ。たとえば短銃のバトルスキル『ブレイクショット（※1）』は、対象にダメージを与えつつ、強制的にメインウェポンを素手にする『ウェポンブレイク』の効果があるのだが、SPはこのウェポンブレイクの成功率、持続時間に影響を与える。

今のSPは560／1000。これだけ貯まれば充分だ。

「ブレイク撃つぞ」

「わかった！」

横目で桔梗がブラストストライクの準備に入るのを確認してから、ボーンウォーリアーに狙いを定め、ブレイクショットを発動する。

《サイカはブレイクショットを発動！》

短銃から二発の弾丸が発射される。弾丸はわずかに左右にブレながら、やや遅い速度でボーンウォーリアーへと飛んでいく。

《サイカのブレイクショットの効果発動！ ボーンウォーリアーにウェポンブレイクの効果》

狙い通り見事命中。ボーンウォーリアーが武器を落とした。

「ほいっと」

すかさず千沙都が防御を解き、シールドブロウ（※2）を発動。盾で強打し、ボーンウォーリアーを気絶させる。

「ガイコツはお化け屋敷だけで充分なのっ」

桔梗のブラストストライクがボーンウォーリアーの脳天に直撃。

勢いを失うことなく地面に突き刺さった大斧の傍らには、見るも無惨な姿に成り果てた骨の残骸が転がった。

《ミナトはボーンウォーリアーを倒した！》

《サイカのLVが10になった!》

《ミナトのLVが10になった!》

《チサのLVが10になった!》

ファンファーレが立て続けに三つ鳴り、三人同時にLVが上がったことを告げた。

あれから一時間半。クローズドベータをやっていた千沙都の助言もあり、思った以上に早いスピードでLVを上げることが出来た。クローズドベータの時は別の国でやっていたらしい千沙都だが、初期マップに配置される敵はだいたいどこも同じ。「LV10手前ならボーンウォーリアーがお勧めです」と言う千沙都に従い、狩り対象をフォレストシープからボーンウォーリアーに切り替えひたすらガイコツを狩ったところ、面白いようにLVが上がっていった。

おかげで早くもLVが二桁に突入したが、武器も防具も著しく消耗してしまった。少し前から狙いを付けづらくなっているし、攻撃力も落ちている。一度修理したほうが良さそうだ。

「一度街に行くか。武器を修理しないと」

「そうですね。ちょうどちさも盾がぼろぼろになってきたところで」

「カメラリアの街がどんどこか、見てみたいしね」

全員の意見が一致。ということで街へ向かうことにした。

「ああそうでした。LV10になれば新しい装備があります。修理せず新しい装備を買う方が良いです」

盾を背中に、片手剣を腰の鞘に収めながら千沙都が言う。

「もう装備変えるのか。さすが低LVは装備の買い換えが早いな」
まだ二時間も使っていないのにさよならか。少し勿体ない気がする。

「本当はもっと小刻みに、だいたいLVが3か4上がる毎に新しい

装備があるです。ですがそんなに毎回買い直してはお金がいくら合っても足りないです。だから、狩り場を大きく変えるときに装備を変えるのが良いです。LV10からは一つ先のマップで狩りをするので買い直すと良いです」

この一時間半で溜まった所持金は1280リナール。一応クローズドベータの情報をもとめたサイトには目を通してるので分かる。これだけじゃ全ての装備を買い変えることは出来ない。

「金が足りないなあ……」

「お金なら骨くずを売れば、装備代くらいにはなりますよ？」

「え、この骨くずそんな良い値段で売れんの？」

ボーンウォーリアー唯一の戦利品、骨くず。結構な数を狩ったのでそれなりの数を三人が均等に持っている。具体的には2ダースほど。これが金になると？」

「はい。細工師のLV上げに使われるです。たぶん細工ギルドにたくさん人がいると思うので、そこで売れば即売れです。ボーンウォーリアーを選んだのは、たしかに経験値も美味いですが、それ以上の良いお金になるからなのです」

さすがクローズドベータをプレイしたお方は格が違うぜ……。ドロップアイテムにまでこだわっていたとは。

「ギャンブラーはお金がかかると言いましたが、実はラウンダーもお金がかかるです。装備できる武器の種類が多いことが売りのクラスですが、基本盾職なので、攻撃職と違って武器よりもまずは防具と盾を揃えるのが先決です。その後武器なのですが、種類が多すぎて、全部揃えてたら破産するです。だから事前にどの武器を使うか絞って、それだけを買って使っていくのがラウンダーの今のスタンダードな育て方なのです。まったく、装備にお金のかかるクラスですよ」

ヤレヤレと言いたげに肩を竦める千沙都。

だったらなんでそんな金のかかるラウンダーにしたんだ？ そう聞こうとしたが、すぐに言葉を飲み込んだ。おそらく千沙都は俺と

桔梗が盾職をやらないと踏み、さらにはどんな構成でも穴が埋められるようにとラウンダーを選んだのだろう。千沙都は優しい奴だ。きっとクラスを選択するときにそう考えたに違いない。

それなら余計なことは言わず、千沙都もこのゲームを楽しめるようにすることが、昔から千沙都を妹と同じように可愛がってきた俺の役目だろう。

「へえ。ってことはどの武器LVを上げていくか決めているのか？」

「はい。盾と片手剣、それと両手剣です」

「たった3つだけか？」

それだと多彩な武器が売りのラウンダーにした意味がないような。「3つだけです。もちろんこれには意味がありまして、ラウンダーはLV30まで上げると『武器特化』というクラスクエストが発生するです。ここで武器を3つに絞ると、それぞれの武器の本職に迫る性能へ引き上げることが出来るです」

つまり、使える武器は少なくなるが、盾はディフェンダー並に、片手剣はパラディンやフォロワー並に、両手剣はバーサーカーやダークナイト並に扱えるようになり、攻撃職、盾職のどちらも本職並にこなすことができるようになる、ということなのだろう。たしかにそう考えれば、武器の数は少ないなれどラウンダーというクラスになった意味は十分ある。

「先を見据えてるんだな」

家計簿とかつけると貯金が凄くたまりそうだな。

「先を見据えているという意味ではみなさんも同じです。ギャンブラーは所持金に余裕が出てくる後半になれば攻撃力の高い弾丸が使えて攻撃職になれますし、バーサーカーも物理攻撃という一点に特化したクラスですから、後半の堅い敵には非常に有利に戦えます」

しかも褒め上手。結婚した旦那さんはさぞ出世するだろう。

森の中を歩き続けてしばらくした頃、突然目の前が開けて見えたのは、大きく高い城壁だった。

ここがカメラリア皇国の首都。皇都カメラリアのようだ。

カメラリアの城下町へと繋がる城門の前には、多くの人で人だかりが出来ていた。よく見ると次から次へと人が湧いている（※3）。どうやらこの人だかりはログインしてきたばかりのプレイヤーのようだった。

「あの城門前のあたり、やけにプレイヤーが湧いてるな」

「カメラリアを出身国に選んだ場合は、あの城門前が出发点ですから」「俺は森の中だったぞ？」

「混雑回避のため、一部のプレイヤーはランダムで首都近郊のマツプのどこかに出发点を変えられるそうです。ちさも桔梗も城門前ではなかったです」

それであんな森の中にポツンと俺一人だけいたのか。納得。

……ん？　そういえばこの二人は、なんで俺がカメラリアを選んだことが分かったのだろう？　俺がログインしたのは9時を少し回ってからのこと。ログインすると数分も経たないうちに桔梗からテルがきたということは、少なくとも俺がログインしてから二、三分後にはログインしていたことになる。二人には俺がカメラリアから始めることは教えていない。というかnNPCのせいでカメラリアだと知ったのは治療に入った後のことだ。

「二人はなんで出身国をカメラリアにしたんだ？」

俺がそう言うと、二人はきょとんとしたあとに、

「なに言ってるんですか。圭さんがカメラリアを選んだからじゃないですか。ここ、あまり人気ないのに」

千沙都が少し呆れた顔をして俺にジト目を向ける。

「いや、俺がログインしたらすぐ桔梗からテルがきたんだよ。前もってカメラリアと決めでもしてないと、そんなに早くログイン出来ないだろ？」

「もちろん決めてたよ。お兄ちゃんだけ一日早くログインしてキャラクター作成できるって聞いてたから、公式サイトフレンドリストで、お兄ちゃんがどこにキャラクターを作成したのかを確認したの。それでカメラリアにサイカってキャラクターを作成してたのを見て、すぐに千沙都にもチャットで伝えて、カメラリアにキャラクターを作ったんだよ」

「クローズドベータの情報があったので、ちさも桔梗もキャラクター作成自体はすぐに終わったです」

「そういうことだったのか。ログインはできなくても公式サイトで確認できたのか。」

「ところで、なんでカメラリアって人気ないんだ？」

千沙都がぼろっと漏らした言葉を俺は聞き逃さなかった。

「経験値もドロップするアイテムも美味しいカニがないからです」
「なるほど」

カニか……。タラバか、毛ガニか。そこが重要だな。

「もちろんそのカニは赤いよな？」

「いえ、緑ですよ？」

「……食用ではないな、うん。」

【サイカ】 種族…吸血鬼♀ クラス…ギャンブラーLV10

武器…片手剣LV5、短銃LV9 採集…採取LV1

【ミナト】 種族…エルフ♀ クラス…バーサーカーLV10

武器…大斧LV9

【チサ】 種族…獣人♀ クラス…ラウンダーLV10

武器…片手剣LV9、盾LV9、両手剣LV5

第2話 ログアウト不能 part 1 (後書き)

※1 ブレイクショット…短銃専用バトルスキル。敵の武器及び手を狙って撃ち、ウェポンブレイクの効果を与える。攻撃力D。

※2 シールドブロウ…盾専用バトルスキル。対象を強打して気絶させる。攻撃力D。

※3 湧く…そこにいなかったプレイヤーやモンスター、アイテム等が新たに出現すること。プレイヤーの場合はログインしたことが同義である。

第2話 ログアウト不能 part 2

「ミッションが始まらない」

そこにいた誰もが口にしていたのはそんな言葉だった。ライブハウス裏口で意中のバンドを出待ちするファンよろしく、城門前にたむろするプレイヤー達は、街に入ろうとするプレイヤーを引き留めでは「ミッションは発生しましたか？」と尋ねながら、周囲のプレイヤーと情報交換をしている。

彼らの話に耳をそばだてると、他の国ではもうミッションが始まっており、その全てが首都と周辺エリアとの境で発生しているらしい。カメラアもそうだろうと踏んで、みんなここに集まっているようだ。

クローズドベータではミッションは実装されていなかった。そのため情報がまったくないなかこんな状態に陥り困っているのだろう。首を捻るプレイヤー達。しかし、俺にはその原因が分かっていた。

それは――

「お兄ちゃんがミッションを進めないからだねっ」

「ですす」

「ぐはっ」

その通り。nNPCである俺が^{サイカ}ミッションを進めていないからだ。『プレイヤーはnNPCがクリアした、又はクリア途中のミッションまでしか進行できない』

システムヘルプに書いてあったことだ。そして、早めにミッションをクリアするようにとも書かれていた。俺はそれを怠り、のうとうとLV上げに勤しんでいたわけだ。

……と、いうわけで。

「よし桔梗、千沙都。街まで走るぞ!」

「あ、現実逃避」

「良心の呵責に耐えられなかったのですね」

なにか後ろで俺のことを貶しているようだがこの際無視。引き留めようとするプレイヤーの手をすり抜けて、俺は城門をくぐり抜けた。

人だかりを抜けて街に入ると、突如システムログが流れた。

《インスタンスエリア（※1）へ移行します》

《ミッション【悠久の皇国】を開始します》

噂通り、首都と周辺エリアとの境でミッションは発生した。

視界の隅で《イベント中は操作不能です》という文字が点滅するなか、一瞬視界が暗転し、その後サイカが俺の操作を離れて街を歩きます。

さっきまで周りにいたプレイヤーが誰一人として見当たらない。どうやらインスタンスエリアに来たようだ。

目を左に向けると、桔梗と千沙都が俺を指差して何か話しているが、遠すぎてちょっと聞こえない。

『まったく……。リーデ様はどこへ行ったのでしょうか？』

遠くの方から黒いメイド服を来た獣人の女性がなにやらぶつぶつと呟きながら、桔梗と千沙都の元に向かって歩いて来る。

『ああ、そのあなた達。失礼ですが、リーデ様を見かけませんでしたか？』

彼女は桔梗と千沙都に気付くと二人に近寄り、そう話しかけた。

「え？ リ、リーデ様？」

突然のことに桔梗が戸惑いを見せる。桔梗の様子に、「ああ」と声を上げた彼女は、

『あなた方はこの街の人ではありませんね？ これは失礼しました。わたしはティルラ＝ホリーと申します』

ティルラと名乗った獣人の女性は、片足を斜め後ろに引き、スカート裾を摘んで軽く持ち上げながら膝を曲げた。所謂カーテシーという挨拶だ。

『見たところ、この街は初めてのようですが……？』

「え、えっと……」

「はいです。今この街に来たところです」

未だ動揺している桔梗に代わり千沙都がティルラの問いに応える。『そうですか。ここ、カメリアは悠久の時から続く古の国。他の国のような煌びやかさはありませんが、静かで平穏な良いところですよ。よろしければ、この国をあなたの第二の故郷にして頂ければ、と思います。それに……これはわたしの感なのですが、あなた方はきっと、わたしやリーデ様の良い友人になると思うのです。……申し訳ありません。まるで質の悪い勧誘ですね。さきほどの言葉は忘れて下さい。それでは、またどこかでお会いしましょう』

再び優雅にお辞儀してティルラは二人の前から立ち去った。

「……今のNPC？」

「うん。リーデの侍女のティルラ。メイド服良かったなあ」

「ほえ、あれNPCなんだ。話しかけてきたからプレイヤーだと思ってたよ……」

三人の様子を遠くから覗いていた『サイカ』がやっとここで動き出す。話の花を咲かせる二人の前に、ティルラに代わるようにして立つ。

「へ？ お兄ちゃんどうし——」

『へえ。あれがリーデ姫、『吸血姫』の侍女のティルラか。昔とまったく変わってないな。……変わってない？ ボクはあの子を知っている？ ……ふん、なるほど。しばらくこの街に留まってみるか』

『サイカ』はティルラが去った方を見ながら、勝手にしゃべり出した。そしてくると桔梗と千沙都に振り返ると、

『君達はこの街に何しに来たの？』

と尋ねた。

「えーと、そうですね……差し当たっては仕事がほしいところです」
やはりティルラの時と同様に千沙都が応える。

『仕事ねー。仕事なんて探すより、この国の傭兵にでもなったほうが良いんじゃない？ あーでもだめか。カメラリアは警備兵くらいしか募集してないからなあ……。』
「たたく、ここの国民は一度戦争というものを味わえばいいんだ。おっと、さっきのは聞かなかったってことでよろしく。そういえば傭兵は募集してないけど、さっきのティルラってヒトが依頼を受けてくれる人を探していたはずだよ。興味があるなら城に行ってみると良い。もしかすると、旅人の君達に余ってる部屋をタダで貸してくれるかもしれないし。それじゃ、ボクは用事があるから。あ、それと今度会ったらボクのことはサイカって呼んでね』

『サイカ』はシュタツと右手を上げて、ティルラとは真逆の方向へ走っていった。

《ミッション【悠久の皇国】をクリアしました》

《インスタンスエリアを終了します》

「おい本当に勝手に動いたぞ！」

インスタンスエリアから戻った俺は若干興奮気味に桔梗と千沙都の元へ走り寄った。

「はい。nNPCは事実のようですね。それにしても、ボクっ娘で
すか。運営は何をターゲットにしているのでしょうか……？」

千沙都が首を傾げる。そんなこと別に気にしなくても良いだろ……。

「はあー。プレイヤーだと思ってドキドキしたー」

「そうだよな。選択肢が出てきたわけでもないのにちゃんと答える
なんて、中に人がいるんじゃないか？」

「中の人などいませんっ！」

桔梗が声を上げる。

「サイカも可愛い吸血鬼の少女で、中の人などいないのです!」

「俺、俺」

自分を指差す。だが千沙都は目をそらしてこっちを見てくれない。そういえば千沙都は小さくて可愛いものが好きだったな。幼い頃に桔梗を気に入った理由が「ちっさくてかわいい」だったからなあ……。

「……まあ、口調は大きく変わっていませんし、俺っ娘だと思えばこれはこれでいいのかも?」

何をぶつぶつと言ってるんだ?

「ミッションキター!!」

突然後ろから男の叫び声が聞こえた。そして彼を皮切りにミッションが発生したことを口々に告げるプレイヤー達。

「やはりnNPCのお兄ちゃんがミッションを進めないとだめみたいだね」

「そ、そうだな……」

そう言われると俺がミッションを進めるのが遅かったことを咎められたような気にさせられる。

「と、とりあえずここを離れようか。俺のせいで停滞していたかと思うと心が痛い……」

胸を押さえてゴホゴホとわざとらしく咳をする。

「さすが圭さんこの臆病者^{チキン}っ」

「千沙都、それは完全に貶してるよな?」

千沙都は「さあ?」ととぼけて口笛を吹いた。

第2話 ログアウト不能 part 2 (後書き)

※1 インスタンスエリア…パーティ毎に生成されるエリア。今回の場合はイベントのためのものであり、他の関係ないプレイヤーをイベントから排除するためのものである。インスタンスエリアにいる間は、既存のエリアから三人の姿は消える。

第2話 ログアウト不能 part 3

城門前から市街地中心部へと移動すると活気の良い声が聞こえてきた。

「ラウド（※1）失礼します。こちら平均LV8のディフェ、ウィザ、ダークの3人です。回復職さん、攻撃職さん募集です。一緒にLV上げに行きませんか？」

「LV1アーチャーです。誰かLV上げ連れてって〜」

「骨くず大量に買います。テル下さい」

「この騒がしさなら言える。ぬるぽ」

「ガッ」

「ガッ」

「うわ、カメラリア田舎過ぎ。修正されるね」

「固定組みませんか？ 長時間ログイン出来る回復の方テルよろ」

「ガッ」

「銅の指輪入荷しました。ぜひ見ていって下さい！」

「ガッ」

「カメラリアからリウスヴァラへはどうやって行けば良いですか？」

「ヤバイ、吸血鬼の幼女可愛い。持ち帰りてええ」

「こちらラウンダーLV5、回復さんペア狩りしませんか？」

「お前ら反応良いなおい」

「リウスはコルディリア平原からいけるよー」

「都会の喧噪が好きな方はぜひルノンクールにでもとっとと行きやがってください」

「銅鉱石買います。個数添えてテル下さい」

「コルディリア平原ですね。ありがとー」

一部まったくラウドする必要のない会話が聞こえる。こういうの

は他のラウドの邪魔になるからあまり良い印象は受けないのだが、俺としては「これぞMMO」という感じがして好きだったりする。

「回復募集多いな。もしかして回復職足りないのか？」

「どうでしょう？ たしかにローブ姿の人をあまり見ない気はするですが」

千沙都が周りを見回す。それにつられて俺も視線を巡らせる。…
…心持ち鎧を着た人が多いかもしれない。

「少ないかどうかはともかく、私達にも回復さんはほしいよねー」
通りの両脇に並ぶ露天を眺めながら桔梗が言う。

「いざとなればちさがセカンドをプリーストにしてるから、回復ができないことはないけど…」

「あ、千沙都もセカンドはプリーストなんだ」

「うん。ソロプレイ用に。桔梗は？」

「私は普通に、パーティに回復がいなかった時用に」

話の流れ的に自然と二人がこちらを向く。

「お兄ちゃんは？」 「圭さんは？」

興味津々といった様子で俺を見つめる。俺からすれば、良く知る年下の女の子二人に見つめられるという「リア充爆発しろ」的な状況なのだが、周囲のプレイヤーから見た俺達は、獣人とエルフの女性二人に構われる吸血鬼の少女という風に、まったく違った様子に見えるのだろう。

と、そんなことを考えつつ、二人の質問に応える。

「ウィザード」

途端に桔梗と千沙都が頭に疑問符を浮かべていそうな顔をする。

「……なんでギャンブラーのセカンドがウィザードなの？」

まったくもってその通り。俺が聞きたいぐらいだ。

未だセカンドクラスの詳しい仕様が運営側から発表されていない現在、セカンドクラスの有用性はパーティでの不足クラス、特に回復職の補填及び、ソロプレイ時の回復くらいしか見つかっていない。能力が制限されるというセカンドクラスの性質上、ステータスが非

常に重要な要素である盾職や攻撃職をセカンドクラスに選ぶのはあまり得策ではない。セカンドクラスには、ステータスよりもクラススキルや魔法が重要となる回復職や支援職を選択するのが賢いやり方だ。ただ、ファーストクラスが支援や回復で、ソロプレイが多いプレイヤーであれば、セカンドクラスに攻撃職を持つてくると言うのも有りといえは有りだ。支援、回復職はパーティを前提としたクラスだから、ソロプレイを重視するのはどうかと思うが……。

しかし、ギャンブラーは支援職と言っても攻撃職寄りの支援職。グロースドベータの情報を見る限りは、基本的に能力が制限されたセカンドクラスの攻撃職よりもファーストクラスのギャンブラーの方が強いらしい。だから、『ギャンブラーのセカンドクラスが攻撃職なのはおかしい』ということは俺も充分承知している。

しかし、

「いや、俺もよく分かんないんだけど、キャラクター作成している時に話した運営の人がギャンブラーにはウィザードかアルケミストが良いって勧めてきたんだよ」

そう、全てはこれ。ゲームの関係者がこっそり俺にだけ教えてくれた情報。俺はこれを信じてセカンドクラスをウィザードにしたのだ。

「運営が、ですか？ ……よくは分かりませんが、運営がそう言うのなら、そうなんだと思うです」

「うーん。ギャンブラーがウィザードかあ……なんだろう？」

二人とも理解はしていないが納得はしたようだ。

しばらく首を捻る二人、あーでもないこーでもないと議論した結果、

「分かんない。それはまた今度考えるところとして、とりあえず骨くず売って装備整えてまたLV上げに行こつ」

ということでの話は終わった。結局いちプレイヤーの俺達が議論を重ねてもそれは全て推測でしかない。大人しくネットの情報を待つのが賢い。

俺達は大勢の人で賑やかな通りを通り過ぎ、ギルド街にある細工ギルドへと向かった。

細工ギルドを訪れた俺達は、さっそくメニュー画面から『売買設定』を選択し、骨くずを一つ100リナールで『販売』設定した。メニュー画面を閉じると視界の左上にある各種ゲージの横に小さく赤いコインのアイコンが表示された。現在販売表示を出していることを示すアイコンだ。

そして、

「骨くず一つ100リナールでいかがですか？」

とただ一言呼び込みをしたところ、一瞬のうちに赤いコインのアイコンが消え、骨くず2ダースはあっという間に完売した。販売設定してから1分と立っていなかった。

あまりの売れ行きに驚く俺と桔梗。ただ一人「早く装備を買いに行きましょう」と冷静な千沙都は俺達を急かすようにさっさと細工ギルドを出て行った。

約3倍になった所持金を握りしめてまずは武器屋へと向かった。

「武器3つはお財布にとっても痛いです」

と頭を抱える千沙都に苦笑しながら全員が武器を買い換え、すぐ隣にある防具屋へと移動する。

ここでは千沙都と桔梗が防具を買い換えた。俺は支援職だから防具にそこまで気を遣う必要はないので、防具の買い換えは次回に持ち越し、近くにいた修理屋で防具を修理するだけで済ませた。

代わりに『銅の弾丸』を99発買うことにした。弾丸の中では一番弱いものだが、それでも悠久の弾丸よりは攻撃力が高い。バトルスキルを使用する時に使うつもりだ。

装備を新調し終えたところで、ふと俺はあることに気付いた。

「このゲーム、倉庫とかはないのか？」

俺の鞆には装備や弾丸以外に羊のドロップ品である羊の肉や皮、そしてなんとなく売り損ねたサクラダケが入っている。まだ始めたばかりで鞆の容量も小さいから、これを倉庫に預けて鞆を空けておきたいと思ったのだ。

「あるはずです」

「はず？」

いまいちはっきりとしない言い方だ。

「クローズドベータの時はあったです。けど、あれは臨時的なものと言ってたです。おそらくは何か別の方法で倉庫を手に入れ……：そういうえば、ミッションの時のサイカさんが『余ってる部屋をタダで貸してくれるかもしれない』と言ってたです。その『部屋』というのが倉庫のことなのかもしれないです」

「ってことは、ミッションをクリアすれば倉庫が手に入るのか」

クローズドベータにはミッションはなかった。だからその頃の倉庫は『臨時的なもの』だったのだろう。

「それじゃ、LV上げの前にミッション進めちゃおっか。お兄ちゃんがミッションを進めないと、この国の人みーんな倉庫使えないみたいだから」

……そうだった。俺はnNPCなんだった。急いでミッションを進めて、俺と、そしてカメラリア出身の全てのプレイヤーが倉庫を使えるようにしないと。……ああ、だからだ。この倉庫があるから、あんなに大勢のプレイヤーがミッションのために集まっていたのか。「よし、急いでミッションを進めるぞ」

「おー」

無邪気に桔梗が手を上げて応える。千沙都はまた後ろでガラスがどうのこうの言っていたが、無視してやった。

第2話 ログアウト不能 part 3 (後書き)

※1 ラウド・loud。大声。通常の会話より広範囲に聞こえる声。パーティ勧誘やアイテム売買等に使用される。迷惑行為対策によりラウドは一回30秒までしか使用できない。再度ラウドするには3分間待つ必要がある。

第2話 ログアウト不能 part 4

俺達が入ってきた城門から北東に位置するカメラア城は、たまにテレビで見えるような中世ヨーロッパの城を思わせる、白塗りの外壁が目を引き背の高い城だった。

橋を渡り中に入ると、高い天井に豪華なシャンデリアを吊した長くて広い廊下があった。廊下の左右はいくつもの通路と繋がっていて、ここがかなり広いエリアだということを臭わせていた。街中の、しかもこんな城の中を広く作ることに意味があるのだろうかと首を捻りつつ先へと進む。

奥まで進むと、突き当たりに人影が見えた。

《インスタンスエリアへ移行します》

システムログが流れ、視界が一瞬暗転する。

《ミッション【鉱山の現地調査】を開始します》

「あ、始まった」

小さく声を上げた桔梗に、『サイカ』が後ろから近寄る。

『また会ったね。こんなに早く再会するとは思わなかったよ。……ってね。嘘だよ。君達がお城に入るのを見かけたから、せっかくだしボクも依頼を受けてみようかなって思ったんだ』

『サイカ』が桔梗、千沙都と視線を移す。

『君達と一緒に楽しめそうだしね』

そう言って微笑む。

この『サイカ』ってキャラクター。見た目は小柄な少女なのに、言動がやけに大人びているな。

『ってことでさ、そのメイドさん。依頼受けに来たよ』

一歩前に出て、廊下の突き当たりにいるティルラに話しかける。

『そう、もう来てしまったのですか……』

何故かティルラは『サイカ』を一瞥し、悲しげに視線を宙に彷徨わせてから俯いた。そんな彼女を見て『サイカ』が怪訝な顔をする。やがてティルラはゆっくりと顔を上げると、

『分かりました。依頼でしたね』

ティルラはポケットから取り出したものを『サイカ』に、そして桔梗、千沙都に一つずつ渡す。

『つい二日前に、ここから南東にあるティリモル鉱山の最奥にモンスターが現われました。おそらく先日発見したミスリルの鉱脈を嗅ぎ付けてきたのでしょう。彼らを野放しにしてはおけません。スケルトンリーダーを倒し、その魔法結界の札を張ってきて下さい』

『サイカ』がお札を見つめる。お札は白地に青色の紋様が描かれている。

『無事依頼を終えれば、それなりの報酬と、ギルドハウスの使用权を与えます』

『たったこれだけの依頼でギルドハウスを、ねえ……。最近この街を拠点とするヒトが少なくなったって噂、本当なんだ』

挑発するような物言いの『サイカ』に、ティルラは目を伏せるだけで何も応えない。

『それでは、わたしは用事がありますのでこれで。無事依頼を完遂することを願っています』

ティルラはお辞儀すると、すっと奥へと消えていった。

『……言い過ぎたかな？ まあいいや。ティリモル鉱山、だったね。さっそく行こう』

『サイカ』は振り返って桔梗と千沙都に言うと、城の外へ向かって歩き出した。

《インスタンスエリアを終了します》

操作を取り戻した俺はすぐに二人に駆け寄る。

「ティリモル鉱山でスケルトンリーダーってのを倒せば良いのか。簡単そうだな」

名前が特徴的でないモンスターは雑魚と相場は決まっている。ただ、スケルトン『リーダー』らしいので、雑魚よりかは少しばかり強いかもしれない。

「そうですね。ただ問題が一つ。行き先がティリモル鉱山の最奥ということです。鉱山というですから、おそらくそこはダンジョン。敵との戦闘は避けられませんか、連戦の確率が高いと思うです」

「数が揃うとキツイな……」

自由に動ける広大なフィールドとは違い、ダンジョンは迷路のように入り組み、その道は狭い。また、モンスターのLVも高く、配置数も多い。序盤のミッションだからそう難しくないと思うが、序盤だからこそ、こんなところで「全滅しました」だなんて醜態をさらすわけにはいかない。

まあつまり、何が言いたいかというと、

「確実にクリアするために、回復職がほしいな」

RFは最大6人でパーティを組むことができる。その基本的な構成は、盾職1、近接職2、遠隔職1か2、支援職0か1、そして回復職1か2となっている。今の俺達は千沙都のラウンダー、桔梗のバーサーカー、俺のギャンプラーの3人。盾、近接、支援だ。これに最低あと一人回復職が入れば、序盤のミッションくらい簡単にこなすことができるだろう。

「回復かぁ……。野良（※1）で募集してみる？」

「そうだな。じゃあ街に戻って――」

「その必要はないです」

そうはつきりと言いきった千沙都に視線を向ける。千沙都は右手を耳元に当てながら、眉間に皺を寄せていた。「どうした？」と声をかけると、左手を前に出して「ちょっと待ってください」と制した。

しばらくして手を下ろした千沙都は、はあと大きく息を吐いた。

「うう……頭の中に声が響くというのは変な気分です」

頭の中に声、ということは、さっき千沙都は誰かとテルをしてい

たようだ。

「で、必要ないっていうのはどういうことだ？」

「回復職ならもう見つかったからです」

こめかみをぐりぐりと人差し指で押しながら千沙都が話を続ける。

「『きつね』さんがプリーストだそうです」

「……え、あいつ来てるの？」

『きつね』とは、俺がFRをプレイしていたときに、よく一緒にパーティを組んだり、ネームドモンスター（※2）を狩ったり、クエストやミッションを進めたり、少女のすばらしさをつらつらと一方的に語られたり、うどんの素晴らしさを永遠とも感じる時間語られたり、その頃自分によく似たキャラクターを使用していた桔梗に貢ぎ物をしたりと、とにかく変態さが目に付く俺のネット上の知り合いのことであり、FRでは『きつねうどん』という名前でプレイしていたFRのプレイヤーのことだ。

「はい。以前ちさが桔梗も圭さんもRFのオープンータテストに参加すると教えたですが、どうもそれが凄く羨ましかったらしくて、『自分もちさ達とプレイがしたい』と、VR対応のヘッドマウントディスプレイをネットで注文し、知人からシリアルナンバーを譲って貰って、さっきインしたところだそうです」

「……あいつ金持ちだったのか」

RFのオープンータテストのために、数十万もするヘッドマウントディスプレイをぽんっと買ってしまったとは……。

「働いているとってたですから、貯金を使ったのだと思います」

ああそうだ。きつねは社会人だったな。そういえばきねはよく「仕事が忙しい」って言っていた。俺はいつもそれに「今日は何キロ小麦粉を練ったんだ？」と返してやったっけ。

「あ、きつねさんからテルが来たです……」

千沙都が眉間に皺を寄せる。

「今からミッションを進めるためにこっちにくるそうです」

「分かった。じゃあここであいつが来るのを待つか」

そう言ってから、ふと重要な事に気付く。

「……あーそれと、今から現実リアルの名前で呼び合うのなしな」

「うん」「りょーかいです」

桔梗と千沙都が頷く。

きつねは数年来の知人と言っても、それはネット上でのことだ。

一度も俺達は彼と会ったことはない。だから現実リアルとネットを混同しないように呼び方を統一する必要がある。別にきつねを疑っているわけではなく、『無闇にリアルをネットゲに持ち込まない』。ネットゲをしているものとしてのマナーだ。

「ところで、RFでのきつねの名前は何なんだ？」

ゲームが変われば大抵名前も変わる。俺や桔梗のように。ちなみに千沙都はFRでも『チサ』だった。

「月見うどんです」

「……結局うどんか」

どこまでうどんが好きなんだ、あいつは。

第2話 ログアウト不能 part 4 (後書き)

※1 野良…身内や知り合いではない他人のこと。

※2 ネームドモンスター…略称NM。固有の名前があるモンスター。たいていの場合そのエリアにいる通常モンスターよりもLVやステータスが高く、強敵である。

第2話 ログアウト不能 part 5

いつの間にか現実世界では正午を回っていたようで、桔梗と千沙都是一旦ログアウトして昼飯を食べに行った。俺はソーク療法様々のおかげで食事を探る必要がないから、二人の代わりに月見がここへ来るのを待つことにした。

入れ替わり立ち替わりプレイヤーが城へとやってくる。邪魔にならないよう廊下の隅に移動し、やってくるプレイヤーの中に月見がないかと視線を巡らせる。ほとんどのプレイヤーがミッションを進めているようで、俺の姿を見つけた何人かのプレイヤーは「ミッションのサイカさんですか？」などと声をかけてきた。俺をプレイヤーと認識して話しかけているみたいだから、おそらくネット上でnNPCの情報を得た人なのだろう。「いや、まあ、はい」と曖昧に応えると、「お仕事頑張ってください！」と応援されてしまった。俺も一般プレイヤーなんだけどな。

十分ほど経ってから頭上に『月見うどん』と書かれたプレイヤーがやってきた。月見がミッションのイベントを見終えるまで待ち、インスタンスエリアから戻ってきたところでテルを送る。

『おい。俺だ。トウヤだ』

少し遠くにいる月見が俺のテルを受けたようで、耳元に手を当てる。その姿は種族の中で最も大きい体をしたアルビオ（♂）という種族だった。相変わらずがたいの大きいキャラクターが好きなようだ。

『だ、誰だ!?!』

テンションが高い。分かってやってるなこいつ。

『トウヤだって言ってるじゃないか』

『ログにはサイカってあるぞ? しかも声が可愛い。トウヤはそん

な声じゃなかった』

『名前変えたんだよ。声は……あれ、月見と俺って直接話したことあったっけ？』

月見と出会ったのはFRで同じパーティになってからだ。VR対応ではないFRは、キーボード入力によるチャットで意思疎通をする。だから月見とこうやって会話したのはこれが初めてのはずなんだけど……。

『ん、ああ、ない。トウヤは男だったから声も男の声で脳内再生してたからな』

『妄想と現実の区別くらいつけとけよ……』

勝手に脳内再生された声が、俺の声だと思われるのは迷惑だ。

『なにっ。俺ほど現実リアルと仮想世界バーチャルを棲み分けている奴なんてそうそういないと思うんだが！？』

『あー、まあ、たしかに……』

たとえ中身が男だと本人から聞かされても、「ネット上ではリアルのことなんてどうでもいい。今の君が可愛い女の子なら、俺の中の君は可愛い女の子なんだぜ！」と、エルフの少女（中の人は男）に花束を渡していた。ある意味、現実リアルと仮想世界バーチャルを綺麗に棲み分けてるよな、月見は……。マネしようとはまったく思わないけど。

『とりあえずこっち来い。西の壁沿いにいるから』

『おう』

月見はキョロキョロと辺りを見回し、手を振る俺を見つけると、何故か嬉しそうに笑いながらは駆け寄ってきた。背筋がぞくつとした。

それからしばらくしてログインしてきた桔梗、千沙都と合流し、さっそくティリモル鉱山へ向かうこととなった。

俺達3人のLVが10に対して、ログインしてすぐミッションを

進めただけの月見のLVは1。

「少しLVを上げさせてくれ」

と頼む彼に俺達は、

「ミッション進めていれば勝手に上がるって」

「回復だけしてくれれば良いです」

「倉庫ほしくないですか？　ほしいならつべこべ言わずついてくるです」

と無理矢理説き伏せ（？）、そのまま鉱山へと直行した。

ティリモル鉱山はすぐに見つかった。カメラアの東門から出たルスティカーナの森の南東にあったそれは、多くのプレイヤーでこつた返していた。

「これなら奥まで敵と戦わずにいけるかもな」

「それだと俺のLVが上がらないじゃねーか！」

「仕方ないですね。だったら協道に余ってるモンスターでも狩りながら進みましょうか」

千沙都が盾と片手剣を構えて誰よりも先に鉱山へと入っていく。

「おお！　さすがチサ。良いこと言うじゃねーか」

「貴重な回復職なので最前線にだけ残ります。攻撃職だったら見捨ててくれます」

「プ、プリーストにして良かったぜ……」

歯に衣着せぬ物言いの千沙都に、月見は心底安堵したようにため息を吐いた。

予想通りモンスターがすっからかんになった通路を奥へ奥へと進みながら、時々脇道に逸れてモンスターを狩る。そうやって他のプレイヤー達よりもずいぶん遅れて最奥までたどり着いたときには、月見のLVも8まで上がっていた。

まあ、その間に俺達3人はLV12になったわけだけど。

《インスタンスエリアに移行します》

《ミッション【鉦山の現地調査】を開始します》

体が動く。前回までとは違い、インスタンスエリアに来ても操作は俺の元にあるようだ。

「一応月見さんは下がっとくです」

「おーけい。キュア（※1）だけ構えとくわ」

「遅れたら後で体育館裏へ呼びつけるです」

「お、おう……」

全員が武器を構える。

千沙都が見据える先に黒いもやが現われ、中からボーンウォーリアーそっくりなストルトンリーダーが登場する。

「グラフィック使い回しか」

「それだけでも良いモンスターってことじゃないの？」

スケルトンリーダーのLVは14。俺達より二つ上だ。これくらいの差であれば余裕だろう。

《サイカはツアップを発動！》

コインを親指で上空へ弾き、短銃で狙いを付けて撃ち抜く。

《表。効果アップ！パーティメンバーに防御力アップの効果》

全員の左手に青のエフェクトが現われる。

「では、いくですよー」

千沙都がスケルトンリーダーに挑発する。攻撃対象を固定されたスケルトンリーダーが赤茶の錆が目立つボロボロの片手剣を振り上げて千沙都へと迫る。

防御で盾を構えた千沙都にストルトンリーダーの片手剣が振り下ろされる。鈍い音を立てて受け止めた片手剣から錆がこぼれ落ちる。スケルトンリーダーの側面に俺が、背後に桔梗が移動し攻撃を始める。

俺は頭部に狙いを付けて短銃を連射する。いくつか外しつつも、弾丸をスケルトンリーダーにねじ込んでいく。

桔梗は背後から大斧を振り下ろし、薙ぎ払い、振り上げてと、その動きは緩慢に見えるが、一撃の重さは短銃の比ではなく、桔梗が大斧を振り回す度にスケルトンリーダーのHPが目に見えて減っていく。

「SP貯まった。いつでもいけるよっ」

桔梗がスケルトンリーダーから距離を取り、大斧を地面に下ろす。

「んじゃ気絶させるです」

千沙都が防御を解き、攻撃を受けながらもシールドブローを発動させる。盾で強打されたスケルトンリーダーは気絶し、その動きを止める。

「当たりますように……」

桔梗の呟きが聞こえる。

《ミナトはヘヴィストライク（※2）を発動！》

ガコツと地面に突き立てた大斧を持ち上げ、スケルトンリーダーに向かって跳躍、両手に持った大斧を頭上から振り下ろす。

スケルトンリーダーに振り下ろされた大斧が眩い光を発する。クリティカルしたようだ。スケルトンリーダーのHPゲージがグンと下がり、一瞬にして0になった。

《ミナトはスケルトンリーダーを倒した！》

あっけなくスケルトンリーダーは地面に倒れ、光の粒となって消滅した。

《インスタンスエリアを終了します》

「予想通りの雑魚だったな」

「難易度高かったら、倉庫もらえない人続出です」

千沙都が武器をしまい、代わりにティルラから貰ったお札を鞆から取り出す。

「貼るのはどこでもいいのでしょうか？」

「さあ、とりあえずそこら辺に貼ってみるか」

スケルトンリーダーが湧いたあたりの壁にお札を貼ってみる。

するとお札が光を発し始め、やがてパンツと小さく音を鳴らして消えた。

《魔法結界が発動しました》

《ミッションが進行しました》

「おっ、ミッションが進んだ」

一応メニュー画面のクエストウィンドウを開いてミッションの進行状況を確認する。次はカメラア城にいるティルラに会いに行くよう書かれている。ちゃんとミッションは進んでいるようだ。

俺に続き、桔梗、千沙都、月見とお札を貼っていく。

「これで後は城に戻ってミッションを進めれば倉庫入手か」

「です。さあ戻りましょう」

「帰りも狩りながらでよろしくな」

「えー」

千沙都が心底嫌そうな顔をする。

「そんなに嫌がるなよ。お前らだってLV上がるんだからいいだろ？　な？」

月見が手を顔の前で合わせて懇願する。

「まあ言われずとも狩る予定でしたけど」

千沙都が武器を変更し、両手剣を持つ。

「両手剣のLV上げたいので」

「……は？　じゃあさっきの嫌そうな顔は……？」

「月見さんに言われるとやる気が削げるですよ」

ヤレヤレと肩を竦め、さっさと歩き始める。

「……お前も大変だな」

月見の腕をポンツと叩く。本当は肩を叩きたかったところだが、アルビオと吸血鬼との身長差では手が届かなかった。

月見はFRの頃からこうやって千沙都に弄られている。こんなことされたら俺だったら怒っているかもしれない。けれど月見が千沙

都を怒ったことは一度もない。その辺りの我慢強さというか大人っぽい対応をするところは尊敬していたりする。

「何言ってるんだ。あれがいいんだろ？ ツンというかSというか、あの容赦ないところがどストライクなんだよっ」

そう言っただけで月見は千沙都の後を追って行った。若干スキップしている。あの巨体で。

「……」

無言で月見の背中を追う。ふと視線を横に向けると、俺と同じように月見の後ろ姿を見つめる桔梗の姿があった。

「そういえば、あいつ変態だもんね」

「うん」

素直に頷く桔梗を横目に、距離のあいってしまった二人の後を追って走り出した。

カメラリア城に戻るとイベントが発生し、無事ミッションをクリア、報酬として2500リナールとギルドハウスを手に入れることが出来た。

さっそく鞆のアイテムを預けようという俺達に、「もう少しLV上げがしたい」と月見が言い、渋々それを承諾。カメラリアの西門から出た最初のエリアでLV上げをすることになった。相手はもちろん骨くずを落とすボーンウォーリアーだ。

二時間ほどが経ち、月見のLVが14、俺達のLVが15になったところで狩りを終了。晩ご飯の時間も近くなってきたと言うことで、また20時頃に集合しようと約束し、一旦解散した。

えっと、羊の肉と皮、それと骨くずを倉庫に移してっど。

街の中心部から少しはずれた場所にあるギルドハウス。ここにはアイテムをしまっておける倉庫と、HPや状態異常を瞬時に回復してくれるベッドがある。室内はカスタマイズ可能で、様々な家具を配置して楽しむことができる。家具の種類、配置位置によってはベッドで休息を取ったときに回復の他に攻撃力アップなどの追加効果が発生したりするらしい。

そういえば、結局サクラダケは売らずに、未だ手元に残っていた。骨くずがいいお金になると分かったことで、無理に売る必要もなくなったのだ。何かに使うかもしれないし、倉庫にしまっておくか。

装備と弾丸だけ残して全て倉庫に移し終えたと、俺も一旦休憩しようと思い、メニュー画面を開き、ログアウトをタッチする。目の前に小さなウィンドウが開き、『ログアウトまであと10秒』とカウントダウンが始まる。

10、9、8、7、6、5、4、3、2、1、0。

……。

あれ、ログアウトされない。

辺りを見回す。もしかして絶妙なタイミングで回線が切断されたのかと思い、メニュー画面を開いて見るも、ちゃんと回線は繋がっているようで、フレンドリストにはさっきフレンド登録した『月見』の名前が白く表示されている。

再度ログアウトをタッチする。再びカウントダウンが始まるものの、さっきと同様に0になってもゲームが終了しない。

まさかこれって……。

ふと嫌な予感が頭をかすめる。それはじわじわと頭から全身に広がっていった、ふわふわと嫌な浮遊感と共に、背筋にひんやりとした冷たさを覚えた。

混乱する頭をなんとか落ち着かせながら、現状をできるだけ冷静に観察する。

そして、一つの答えを導き出す。

……まさか、ゲームに閉じ込められた？

【サイカ】種族…吸血鬼♀ クラス…ギャンブラーLV15

武器…片手剣LV10、短銃LV15 採集…採取LV1

【ミナト】種族…エルフ♀ クラス…バーサーカーLV15
武器…大斧LV15

【チサ】種族…獣人♀ クラス…ラウンダーLV15

武器…片手剣LV15、盾LV15、両手剣LV13

【月見うどん】種族…アルビオ♂ クラス…プリーストLV14
武器…杖LV13

第2話 ログアウト不能 part 5 (後書き)

※1 キュア…回復魔法。対象1体のHPを回復する。

※2 ヘヴィストライク…両手武器専用バトルスキル。対象に向かって跳躍し武器を振り下ろす。命中率やや低い。攻撃力B。

第1章 登場人物

サイカ

リアルネームとおちかけい
現実本名…遠近圭

私立千里学園高等学校2年A組所属。

本編の主人公。山間部出身であり、現在は市内の学校に通うため妹の桔梗と共に親戚の家で暮らしている。親戚の家といっても、暮らしているのは親戚の家にある『離れ』なので、実質二人暮らしである。

本人は気付いていないがシスコンである。

桔梗と夏休みを利用して『Rain Online』のオープンベータテストに参加する。

参加数日前に行った健康診断により腫瘍が見つかり、現在は治療を受けながらプレイしている。

原因不明のログアウト不能に陥る。

【ステータス】

キャラクターエディット…特別仕様

髪…金色 髪の長さ…ロング 髪型…サイドポニーテール

右目…青 左目…赤 身長…低い 外見年齢…10代前半

種族…吸血鬼♀

クラス…ギャンブラーLV15

・クラススキル…ツアアップLV1

・武器（武器名下は使用可能バトルスキル）

片手剣LV10…クイックブレード

短銃LV15…リロード、ブレイクショット、ペネトレイト

ショット、

アナザーショット

・採集

採取LV1

【装備】

右手…リボルバー改

左手…ステイレット改

頭…赤いリボン

胴…ヴァンパイアコート

腕…ヴァンパイアグローブ

脚…ヴァンパイアハーフパンツ

足…ヴァンパイアロングブーツ

特殊…なし

アクセサリ1…なし

アクセサリ2…なし

アクセサリ3…なし

アクセサリ4…なし

ミナト

リアルネーム とおちかきよう
現実本名…遠近桔梗

私立千里学園高等学校1年D組所属。

圭の妹。兄以上のネットゲ中毒者。ただし現実^{リアル}に支障が出ない程度に抑えている。

圭が操作するサイカと似た容姿をしている（主に体型的な意味で）。身長[。]の体型のことを指摘すると兄であっても許さない。ブラコンであり、本人もそれを自覚している。

【ステータス】

キャラクターエディット

髪…銀色 髪の長さ…ロング 髪型…ストレート

両目…青 身長…高い 外見年齢…20代前半

種族…エルフ♀

クラス…バーサーカーLV15

・クラススキル…フェロシティLV1

・武器

大斧LV15…ブラストストライク、ヘヴィストライク

ライズストライク

【装備】

右手…ブロンズアックス

左手…装備不可

頭…赤いリボン

胴…ブロンズメイル

腕…ブロンズアーム

脚…ブロンズホーズ

足…ブロンズレギンス

特殊…なし

アクセサリ1…なし

アクセサリ2…なし

アクセサリ3…なし

アクセサリ4…なし

チサ

リアルネーム リアルネーム
現実本名…比与森千沙都 ひよもりちさと

私立千里学園高等学校1年C組所属。

圭や桔梗と同じ地区出身であり、高校進学の際に引っ越して両親と市内で暮らしている。

重度のネットゲ中毒者であり、現実リアルにもそれが影響している。ただし明るいキャラクターのため学校では人気者であり、友達も多い。若干毒舌であり、特に月見うどんに対しては容赦ない。むしろわざわざ毒舌を吐いているようにも見える。

【ステータス】

キャラクターエディット

髪…黒色 髪の長さ…ミディアム 髪型…ストレート

両目…青 身長…高い 外見年齢…10代後半

種族…獣人♀

クラス…ラウンダーLV15

・クラススキル…挑発LV1

・武器

片手剣LV15…クイックブレード

盾LV15…防御、シールドブロウ

両手剣LV13…ヘヴィストライク

【装備】

右手…ステイレット改

左手…ブロンズシールド

頭…赤いリボン

胴…ブロンズメイル

腕…ブロンズアーム

脚…ブロンズホーズ

足…ブロンズレギンス

特殊…なし

アクセサリー1…銅のリング

アクセサリー2…銅のリング

アクセサリー3…銅のピアス
アクセサリー4…銅のアミュレット

月見うどん

リアルネーム
現実本名…不明

圭達と『F R a i n O n l i n e』上で知り合ったネット友達。
現実では社会人らしく、平日は基本夜しかログインできない。

当初R Fはやるつもりではなかったが、圭達がオープンベータテストに参加すると聞き、急遽参加することを決め、V R対応ヘッドマントディスプレイとオープンベータテストのシリアルナンバーを用意した。

Mの素質があるらしく、チサに弄られると喜ぶ。

【ステータス】

キャラクターエディット

髪…黒色 髪の長さ…ショート 髪型…ストレート

両目…黄色 身長…高い 外見年齢…30代前半

種族…アルビオ♂

クラス…プリーストLV14

・クラススキル…神の手LV1

・武器

杖LV13…キュア、キュアオール

【装備】

右手…シダーの杖

左手…装備不可

頭…装備不可

胴..アルビオローブ
腕..アルビオグロブ
脚..アルビオズボン
足..アルビオサندان
特殊..なし
アクセサリ1..なし
アクセサリ2..なし
アクセサリ3..なし
アクセサリ4..なし

第1章 登場人物（後書き）

11／11／28

これにて第1章終了します。ここまでお読み下さり、本当にありがとうございます。

また、数多くの評価、お気に入り登録を下さった方々にはとてもとても感謝しています。

感想を頂いたり、ポイントが上昇すると、やはり嬉しくなるもので、「早く次の話を書こう」と励みになりました。

次回からやっと物語が動き出しますので、どうぞこれからもよろしくお願いいたします。

追伸…一応確認はしているのですが、それでもよく誤字脱字があると思います。指摘して頂きますと助かります（笑）

ある日のうどんさん part 1

俺の名前は月見うどん。とある建設関係の会社に就職して数年の、
しがないサラリーマンだ。趣味はインターネット通販を利用しての
うどんの食べ比べ。そしてネットゲだ。

その趣味のネットゲは、クローズドベータテストから参加していた
『Rain Online』を高校生の頃からずっと飽きること
なく続けていた。

『続けていた』

そう、10年という長い間続けていたFRに、俺はつい先日別れ
を告げた。

とは言え、課金を止めているわけではない。FRには、その世界
で知り合ったたくさん知人がいる。たとえばFRというゲームは引
退しても、彼らに会いにログインすることはこれからも間違いなく
あるからだ。

そんなたくさん知人がいるFRを引退したのには理由がある。

当時、FRの続編とも言える新作VR対応MMORPG、『Re..
Rain Online』。通称RFと呼ばれるそれがクローズ
ドベータテストを始めると発表したときは、国内初のVR対応型M
MORPGとして大きな注目を浴びた。FRのプレイヤーの多くも
それに興味を示し、連日その話題で持ちきりになったが、俺にとっ
てはそんなことどうでも良かった。ネットゲとは、たしかにゲームの
質も重要だが、それ以上に知人と時間を共に過ごすこと、それこそ
がゲームの質よりも俺にとってはずっと重要なことだった。

VR機は数十万というパソコンが家庭に普及し始めた頃の価格と
変わらないほどの高額商品であり、おいそれと用意できるものでは
なかった。案の定、知人の大半はVR機を所有しておらず、「RF
はプレイしない」という人がほとんどだった。だから俺もRFのク
ローズドベータの応募が始まったことを耳にしても、見向きもしな

かった。

しかし事態は急展開した。

数年来の知人であり、同じカンパニーに所属していた心の友と書いて心友しんゆうと読む『チサ』が、クローズドベータに参加しているというのだ。

俺は、以前彼女がVR機を持っていないと言っていたことから、RFはやらないだろうと踏んでいた。

しかし、よく考えればそれは予想できたことだった。一度俺はチサとオフ会で会ったことがあり、その時に両親が自分に甘いことや、そこそこのお金持ちだということを会話しているうちに入手していた。重度のネットゲ中毒者と言っても良いチサが、そんな環境に身を置きながら、RFに参加しないはずがなかった。

クローズドベータを済ませ、久しぶりにFRに顔を出した彼女は俺に、

「トウヤもクローネもオープンベータテストに参加するって」

と、そう言った。

トウヤもクローネも、よくパーティやクエストを一緒にした親友だった。

もう迷う必要はなかった。俺はカンパニーのみんなや知人に一言ずつお別れを告げ、ひとまずFRを引退した。

貯金でVR機をネット注文し、オープンベータテスト参加に必要なシリアルナンバーは会社の知り合いから譲って貰った。

それにしても、日本の文化である『土下座』とは本当に素晴らしなものだ。あの背筋のぴんと伸びた綺麗な姿勢から繰り出される深々としたお辞儀はどんな人の心でも驚づかみにしてしまう。人通りの多い廊下ですれ違った彼を見つけ、その場で誠心誠意の土下座をしてみせたところ、ゴリゴリと床に額をなすりつける俺に彼は快くシリアルナンバーを譲ってくれた。いやあさすが土下座だ。

「ありがとう！」とまた土下座をした俺を慌てて止めた彼の顔がドン引きしていたように見えたのは気のせいだろう。

とにかく、そんなわけでRFにログインした俺は、事前にチサから聞いていた3人のクラス構成から鑑みて、プリーストをすることにした。種族はもちろんムキムキマッチョなアルビオだ。マッチョいいよマッチョ。割れた腹筋がso sexy。
……まあ、ローブで腹筋は隠れたわけだが。

ギルドハウスを手に入れ、俺の提案によるLV上げを終えた俺達は、晩ご飯の時間が近いこともあり、20時に集合することを約束してひとまず解散した。

クローネ改めミナトがログアウトし、トウヤ改めサイカがギルドハウスへと去って行った。チサも落ちるのだろうかと見ていると、怪訝な顔をされた。

「なんです？」

「いや、チサは晩飯いいのか？」

「今食べてますよ？」

そう言った彼女の口はももごと動いていた。ヘッドマウントディスプレイ付けたまま食べるなんて、なんて器用な奴なんだ。

「そういう月見さんは？」

「夜は食べないことにしてる」

「……ああ。そういうば月見さんってちょっとぽっちゃりさんだったですねえ」

ニヤニヤとチサが笑う。

……言えない。そのオフ会の時に「ちさはどっちかという痩せてる方が好みです」という言葉を聞いて晩飯を食べなくなったなんて。

「さて、ご飯も食べたし、ちょっとネットで情報でも集めるです」
メニユー画面を開き、『インターネット』をタッチする。新しい

ウィンドウが開き、おなじみのRFの公式サイトが表示される。

RFはVR機を使用するという特性上、いつものようにパソコンからブラウザを起動してネットサーフィン、ということがやりにくい。いちいちログアウトしなければならないからだ。そのためRFではログインしながらでもインターネットができるようになってい。とは言え、公式サイトくらいしか見られないのだが。

俺も何か調べてみるか。

チサ同様にインターネットウィンドウを開き、公式掲示板のリンクをタッチする。

とりあえずプリーストのスレッドに目を通しておくか。

クラス専用掲示板からプリースト専用スレッドをタッチする。

プリースト組合2

1..セレナ

プリーストについて語り合うスレです。

荒らし煽りはスルー推奨です。レスを返したあなたも荒らしとなります。

テンプレは<<1から<<5です。

31..プレアデス

キュア使用時は対象をターゲットするわけだが、この時ターゲットされた相手には『○○にターゲットされました』とログが流れる。無闇にターゲットしないように。

35..鈍器コング

おいなんでこのゲーム、プリーストはハンマー装備できないんだよ。鈍器装備させろよ鈍器。殴りたいんだよ。ボーンを撲殺したいんだよおお。

36..白いアルビオ

ボーンはすでに死んでいる W W W あれ不死系 W W W W

37..ホリック

<<35 無い物ねだりしてないで、杖で殴れば良いんじゃない？

38..白猫

杖LV15で覚えるパナケアは状態異常を回復するけど、確率は50%くらい。しかも1つずつしか治せない。微妙スキル。このLV帯は状態異常もそんなにきつくないし、放置でも良いかも。LV25で覚えるパージは2つまで治せて100%。こっちは神スキル。

40..鈍器コング

<<37 折れた。

41..烏龍ティー

折るなよ W W W W

43..ヒーロー

プリーストは大人しく隅っこでキュアしてればいいんだよ。

RFは遊びじゃないんだ。

45..アリアス

<<43 遊びじゃないんだ（キリッ

ヒーローさんお勤めご苦労様です。とっととパラディンスレへ帰れ
^^ ^^ ^^ ^^

46..ノノ

<<43 プリーストスレは初めてか？ 力を抜けよ。

50..鈍器コング

あーあ。これならマテリアライザーの方が良かったな。

55..Meet

<<50 いやならやめてもいいんじゃないぞ。

以降はヒーローとやらが荒らしとなってレスが続くだけ、とくにこれといって有益な情報はなかった。プリーストのスレッドを閉じて他に何かないかとスレッド一覧に目を通す。

その中に『サイカたんにハアハアするスレ』というスレッドを見つける。

……やばい、すげえ見たい。すげえ見たいが、これを開くと次からサイカをまともに見れなくなるかもしれない。

泣く泣く俺はそれを素通りする。

いくつか有益そうなスレッドを開くも、どれもまだ模索状態で確定情報は少ない。分かったことはプリーストは大人しくキュアでもしてろってことぐらいだ。

そんななか、ふと変なタイトルのスレッドを見つける。

そんなことより獣人とpart12

1..ストラトス

このスレは獣人を愛でるスレです。みんなであつたり獣人を愛でましょう。

650…マツチ

カメラアのミッションに出てくる獣人良いよな。
獣人メイドハアハア。

651…玄米茶

カメラアは狩り場は良くないけどミッションは良いよな。
ルノンクールなんてむさいおっさんばかりだよ……。

654…エイナ

獣人が可愛すぎて生きるのが辛い

665…獣人ハンター

狐耳は至高。あのふさふさがタマラン。

670…とある裁縫職人

インナー生産してたらスク水みたいなのが出来た……。

671…獣人ハンター

<<670　ほう……じゃあそのスクリーショットをここに貼っ
てみようか。

672…ガリ

<<673　はよ

673…ヒューマンの紳士

パンツ脱いだはよ

はよ！

674…まりあ

パニエラっていう脚装備してみたけど……物凄く尻がでかく見える。

675…プラナス

<<674 我々の業界ではご褒美です。

676…レイノラ

<<674 我々の業界でもご褒美です。

677…ナルル

<<674 本が薄くなるな……。

「……」

なるほど、そういうスレッドか。

俺はおもむろにキーボードに両手を構える。

679…月見うどん

紳士の社交場と聞いて。

「よし」

「なにがよしですか？」

「おおう！」

慌ててメニューを閉じて振り返る。

「なに焦ってるんです？ まさか変なスレ見てたんじゃ……」

「そ、そんなわけあるはずがないじゃないか。は、ははは」

「……まあ別に良いです。それより行くですよ」

そういつてチサが歩き出す。俺は慌ててその後を追う。

「どこに行くんだ？」

「決まってるです。月見さんのLV上げです」

セカンドクラスのパレディンにチェンジして、ソロでボーンウォーリアーを狩る。その横では不謹慎にも墓の上に座って、手を出さず俺を見つめるチサの姿があった。

「なあ、チサもやらないか？」

「チサのLVが上がるです。チサのことはいいから、早くLV15にしてみんなに追いつくです。ほら、前見るです」

「前? ……ふげっ!？」

頭にボーンウォーリアーの棍棒が直撃する。

「い、いってえ〜」

「あはははっ。月見さん涙目になってるですっ」

俺を指差して笑うチサ。本当は自分のことをしたいだろうに、俺に付き合ってくれている。俺はそんなチサの優しさが好きだったりする。

「ほらほら、頑張るです」

手を振り上げて応援するチサを見て、苦笑を一つして振り返り、すかさずボーンウォーリアーにクイックブレードを発動する。素早い動作で二回モンスターを斬りつけるバトルスキルだ。

切り裂かれたボーンウォーリアーはHPを0にして消滅した。

「休んでないで次行くです」

「はいよっ」

チサから借りた片手剣と盾を構え直し、俺は次のモンスターへ走り出した。

第3話 与えられた道 part 1

結局あの後、一度ベッドで休憩してからログアウトしてみたり、ラウドしてからログアウトしてみたり、ギルドハウスを出てからログアウトしてみたり、モンスターと戦闘してからログアウトしてみたり、キノコを蹴ってまたサクラダケ一つ手に入れてからログアウトしてみたり等々、いろいろなシチュエーションを試してみたが、ログアウトウィンドウは10から0のカウントダウンを示すだけで、一向にログアウトする気配はみられなかった。

もしかして不具合か？

そう思いメニュー画面からインターネットウィンドウを開き、公式サイトをチェックする。ニュースや不具合情報など、一通り全てに目を通すが、何もそれらしきことは書かれていなかった。まだ運営側が認識していない不具合なのかもしれない。

次に公式掲示板を見ることにした。さすがにスレッドの数が多いため、初心者用質問スレッドや不具合報告スレッド、雑談スレッドなどを中心に回る。また、掲示板に書き込むことをしないプレイヤーが街中で叫んでいるかもしれないと考え、スレッドに目を通しつつ街の中心部にあるバザー広場へと向かった。

しかし、ログアウトできなくなったという旨の書き込み及び話は、どこからも得られなかった。公式サイトも掲示板もゲーム内も、どこも平和そのものだった。

「さて、どうしたものか」

と呟いてみる。内心は冷や汗だらだらなのだが、表面上くらはクールに決めたい。

そんな俺を余所に、周囲ではさっきと変わらない活気の良いラウ

ドが飛び交っている。

まさか本当に、ログアウトできなくなったのは俺だけか？

周囲を見回しながら思案する。

情報が遅れている可能性も完全には否定できないが、今の公式サイトや掲示板、そしてゲーム内のスルーっぷりからすると、そうとしか考えられなかった。

どうして俺だけがこうなった？

考えるまでもなく、『nNPC』のせいとか思えない。

nNPCはキャラクター選択画面に表示されないような特殊なキャラクターだ。その特殊さ故に、一般のキャラクターとは違う、何か別の不具合が出たのかもしれない。

……などと俺がごちゃごちゃ考えてもなにも変わらない。とりあえず俺が取るべき行動は、

「GMに報告するか」

メニューからサポートウィンドウを開き、いくつかある項目から『不具合報告』を選択する。『どのような内容なのか、具体的に書きください』と書かれたすぐ下にあるコメント欄に『ログアウトできなくなった』と書き、その後考え直して『nNPCについて』と書き換えて送信する。

普通のGMではマニュアル通りの回答しか返さず、役に立ちそうにない。だからキャラクター作成時に話した運営の人を呼ぶのが良いだろう。そのためには直接ログアウトできなくなったことを書くよりも、あの人の担当であるnNPCについて書いた方が来てくれる確率が高いだろう。俺はそう判断した。

しかし『君については私が担当することになっていますから、出来る限り私に対応します』と言っていたから、そんな心配せずとも、あの人は来てくれると思うけど。

一人で何百人というプレイヤーを対処しているGM（あの人）がすぐ着てくれるはずもなく、その後流れたシステムログには『現在あなたは256番目です。およその待ち時間は2時間です』と書かれていた。

さすがに2時間もぼーっと待つのは勿体ないので、生産でもしてみることにした。

時間が経っても未だログアウトできないことに言い知れぬ不安はあるけど、元々あと30日くらいはRFをプレイし続けるつもりだったんだ。『ログアウトしない』が『ログアウトできない』に変わっただけ。そう大した違いはないじゃないか。

と、自分に聞かせることで、いつもの自分を維持していた。

『というわけで、お勧めの生産ってなに？』

ルスティカーナの森にいる月見にテルを送る。

掲示板で調べても良かったのだが、先行組が生産スレッドに常駐し、後続の俺達に甘い密を吸わせないようにと、嘘の情報を流している可能性もある。オープンベータテストが始まってまだ一日も経っていないこの時期は、知人に聞いた方が確実だろう。

ちなみに余談だが、驚くことに月見とは数年来の付き合いだったのに、お互いをフレンドリストに登録してなかった。FRは検索機能が充実していたせいで、フレンドリストがあまり必要なかったのだ。

せっかくなので、と月見とは先ほどやっとフレンドリストに互いを登録したところだ。

『なんで俺に聞くんだよ！ はあ、はあ……』

『月見ってFRじゃ生産かなりやってただろ？ だからRFでも生産やるだろうから、情報集めてるんじゃないかと思って。……ところでなんでお前息が上がってるんだ？』

仮想現実バーチャルで息が上がるなんてことがあるのだろうか？ まあずつと喋っていたとか、連戦連戦で息をするのも忘れていた、とかなら分からなくてもいいけど……。

……あつ。

そのとき、俺の頭の中で、ある言葉が浮かんだ。

『まさかお前……』

『はあ、はあ……なんだあ？』

『いくら獣人や吸血鬼の少女が可愛いからって見抜きはやめとけ！』

『するかそんなことっ!!』

いったあ……。

頭にキーンと響く大声で否定された。

さすがの月見でもそれはなかったか。

『……じゃあなんでハアハア言ってるんだ？』

『はあ、はあ。ひ、疲労がたまったらまま連戦してるからだよ。一回やってみ？ すんげえキツイから』

そういえば戦闘中にダメージを受けたとき、攻撃を受けた箇所バーチャルに電流が流れるような軽い痛みが走った。仮想現実バーチャルを出来るだけ現実リアルに近づけるために、擬似的な痛みや疲労をプレイヤーに与えているのかもしれない。

今度試してみるか。……いや、痛いのは嫌いだからやめておこう。どうせそのうちに嫌でも感じることになるだろうから。

『話戻すけど、お勧めの生産ってわかるか？』

『ち、ちよって待ってろ。今聞いてみる』

聞いてみる？ 誰か近くにいるのか？

少しの沈黙の後、月見からテルが返ってきた。

『ギャンブラーなら弾丸とコインが生産できる調合師がお勧めらしいぞ。自作できれば高額に設定されたNPCから買う必要がなくなるし、材料を持ち歩いて現地生産すれば、鞆がコインや弾丸で一杯になることもないしな。稼ぎ的な面で言うところ、ギャンブラーがあまり人気がないせいで弾丸やコインは売れそうにないが、アルケミストが使うポーションやらエーテルやら万能薬は高めに売れるらしいぞ』

アルケミストとは、アイテムの効果を増幅して自身やパーティメンバーに使用することができるクラスだ。今のところ攻撃系のアイテムには実用的なものはないから、専ら回復アイテムを消費してリリースのように立ち回るのが一般的のようだ。

『なるほど。調合師か……わかった、ありがとう』

『おう』

おう、ねえ……。なんとも上機嫌そうな返事だ。

テルを終えた俺は、おもむろにメニュー画面を開き、フレンドリストウインドウを表示する。

『うどん 月見うどん ルステイカーナの森』

『千沙都 チサ ルステイカーナの森』

そこにはオンラインであることを示す明るい白文字で、千沙都と月見の名前が並んでいた。

あらあらまあまあ。仲がよろしいことで……。

そつとメニューを閉じた俺は、ニヤニヤとする顔をなんとか引き締めながらギルド街へと向かった。

……ん、でも待てよ。月見は社会人、しかも数年は働いているから、最低でも20代後半。

そして千沙都は15歳。

……軽く犯罪じゃないか？

第3話 与えられた道 part 2

ギルド街へと直行しようとした俺だが、生産をするのなら元手がある、ということ一度ギルドハウスに戻って骨くずを倉庫から引き出して細工ギルドへと向かった。

「よし、売るか」

細工ギルドへきた俺はさっそくメニュー画面から『売買設定』を選択し、骨くずをさっきと同じ一つ100リナールで『販売』設定

――

『もしもし』

突然テルが入ってきた。男の声だった。ログを確認すると名前は『エイリアス』。

『もしもし。何でしょうか？』

『さっき骨くずを売っていた方ですよ？ もしかしてまた骨くずを売りに来たんですか？』

俺が今細工ギルドにいるのを知っている、ということは近くにいるのか？

ギルド内を見渡す。すると灯台下暗し、すぐ隣に彼はいた。

俺より頭二つないし三つほど背の高い、青い髪をした青年。種族はヒューマンで、鎌を装備しているからクラスはダークナイトのようだ。

こんなに近くにいたのなら、わざわざテルしなくても良いのでは？ と思ってから、さっき一瞬にして骨くずか売れたことを思い出す。なるほど。通常の会話だと他の人にも聞かれて、誰かに売られてしまうかもしれないから、か。

『はい。また2ダースだけです』

『良かったら売ってくれないか？　一つ300リナールで買います』

300？　300ってさっきの3倍じゃないか。それは悪い気がする。

『さっき100リナールで売ったので、100リナールで良いですよ』

『いえ、今の骨くずの相場は200〜400リナールなので』

『へー、あれからそんなに経ってないのにもう上がってるんですね。ま、でも100リナールでオーケーです』

素直に彼に従えば売値は3倍になる。だがこれは元々100リナールで売ろうと決めていた骨くずだ。相場を聞いたから価格を上げます、なんてことはしたくなかった。

『でも——』

む、ごねる気か？　こっちが100リナールで良いと言ってるんだから大人しくトレードすれば良いものを……。

だったら先手必勝。問答無用で彼にトレード申請を出す。

『え？　まだい——』

『ほら、つべこべ言わずトレード。一つ100リナールです。安くも高くもなりません』

『……では』

何か言いたそうに口を開けた彼だったが、俺に急かされたことで渋々トレードに応じた。

トレードウィンドウが開き、俺は骨くず2ダースを提示する。少し遅れて彼が2400リナールを提示する。それを確認し、確定を2回タッチする。

トレードウィンドウが閉じる。交渉成立だ。さっき骨くずを売って装備を買ったあまりとミッシェンの報酬、そして今の骨くず代で所持金が5750リナールとなった。

これだけあれば少しは生産できるだろう。

『ありがとうございます』

『いえいえ』

エイリアスさんが深々と頭を下げる。

礼儀正しい人だ。最近じゃ初対面からため口で話す人も希じゃなくなってきたというのに。

『そうだ。サイカさんは何か生産していますか？』

『まだ何もしてないけど、これから調査をしようかなと思ってるところです』

『調査ですか。ではこれをどうぞ』

エイリアスさんからトレード申請が来る。無視するわけにもいかないので応じる。

トレードウィンドウが開き、エイリアスさんが『水色の魔鉱石』というアイテムを10個提示する。

『ん？ これは……？』

『骨くずを安く売ってくれたお礼です。たしか調査は水色をよく使うはずなので。ギルドで貰ったのは良いですが、細工では使い道がなくて』

そういつてエイリアスさんが微笑む。

さっき無理矢理トレードしてしまった手前、無下に断るわけにもいかない。

……って、『ギルドで貰った』？

『エ、エイリアスさん』

トレードウィンドウ開きっぱなしのまま話しかける。

『はい？』

『さっきギルドで貰ったっていったけど、これギルドで貰えるんですか？』

エイリアスさんがきょとした顔で俺を見つめる。そして、『公式サイトの特典にも書いてあったと思いますが、自分のクラスのギルドマスターに話しかけると、1000リナールと魔鉱石を全種10個ずつ貰えるんですよ』

『な、なるほど……』

まさかこんなところでもチュートリアル未読の弊害が……。

『それよりも、トレード確定お願いします』

『へ？ は、はい』

促されるままに確定を2回タッチする。

……あ。受け取ってしまった。

骨くず2ダースをちよつと安く売っただけなのに水色の魔鉱石を10個も貰ってしまった。これ、どう見ても俺が得しすぎていないか？

……よしっ。

『エイリアスさん、まだ当分ここにいますか？』

『はい。夕飯まで生産するつもりなので』

『じゃ、すぐに戻るのでもそこにいてください』

『……？ 分かりました』

若干首を捻っているエイリアスさんを尻目に細工ギルドを出た。

同じギルド街にあるギャンブラーギルドへと向かう。すぐにたどり着くと中にいたギルドマスターに話しかける。『ギャンブラーとは何か？』について数分話し込まれた後に、支度金だと言って、エイリアスさんが言っていたように1000リナールと6種の魔鉱石を10個ずつくれた。

すぐに細工ギルドへ戻り、さっきと同じ場所にいたエイリアスさんにトレード申請する。

エイリアスさんがトレードに応じ、トレードウィンドウが開く。

『細工師って魔鉱石はどれを使いますか？』

『黄色の魔鉱石です』

さっき貰ったアイテムの中から黄色の魔鉱石10個を提示する。

『お返しです』

『いえ、さっきの魔鉱石は骨くずを売って貰ったお礼なので——』
ここでもごねるかっ。

『だったら俺もギルドで支度金と魔鉱石が貰えることを知らなかったの、その情報を教えて貰ったお礼です』

エイリアスさんの瞳をじっと見つめる。やがて彼は、はあとため息をついて、

『……分かりました。ではありがたく頂きます』

エイリアスさんが確定をタッチし、トレードウィンドウを閉じる。
『ではもう一つ僕から情報を。序盤の調合のLVを上げるなら海水と水色の魔鉱石で塩を生産するのが良いですよ。最も低コストでLV上げができます』

『おお。ありがとうございます』

そういうとエイリアスさんは微笑みながら頷いた。

『それと、フレンド登録良いですか？』

『どうぞどうぞ』

お互いをお互いのフレンドリストに登録する。

『それじゃ、そろそろ調合ギルドへ行きます。また今度一緒に狩りにでも行きましょう』

『はい、ぜひお願いします。……あっ』

『ん？』

ギルドを去ろうとした俺は足を止めて振り返る。

『あ、いえ、ふと思ったのですが……。そういえばサイカさんって、ミッシェンのサイカと同名同種族で、姿もよく似ていますね』

『よく言われます』

少し苦笑しつつ応える。

似てて当たり前だ。本人ですから。

第3話 与えられた道 part 3

調合師ギルドの扉をくぐると、科学教室のような薬品っぽい臭いが漂ってきた。卵の腐ったような臭いじゃなくて良かったとほっとしつつ、調合師ギルドの販売員に話しかける。

『いらっしやい。ここは調合師ギルドの販売所だよ』

NPCらしい言葉と共にショップウィンドウが開く。ずらっと一覧となって並ぶ商品の中から、海水を10個と試験管を購入する。

この試験管とは、特殊という枠に装備するアイテムであり、調合の生産をするために必要なアイテム……らしい。ぶっちゃけると、さっきようやくチュートリアルを斜め読みして知ったことなので詳しくは分からない。とにかく生産をするには、この特殊枠に装備する『生産道具』が必要だ、ということだけを理解していた。

さっそく試験管を装備して、人の邪魔にならないよう部屋の隅の方へ移動する。

……で、ここからどうやって生産するんだろう。

前作のFRではメニューに『生産』にという項目があって、それを選択すると生産ウィンドウが開き、そこに必要な材料をセットすると生産が始まるというシンプルなものだった。しかしこのゲームは、見たところメニュー画面に『生産』という項目は見当たらなかった。

たぶんこの試験管がトリガーなのだと思う。しかし使い方が分からない。

どうやって生産しているのだろうと首を捻りながら、ふと隣にいるプレイヤーに目を向ける。

そうだ。他人が生産しているところを見れば良いんだ。

ということださっそく観察を開始する。じーっと見つめていると、試験でカンニングをしているような気分になり、すこーしだけ罪悪感を覚える。

その少女……少女といっても俺サイカよりは年上に見える『朱莉』という名の子は、赤い目と同じく赤い長い髪が特徴的な吸血鬼だった。腰に本をぶら下げていることから、クラスはアルケミストだろう。

彼女の足元には蓋付きの壺のような物が置いてあった。彼女はその壺に何かを放り込み蓋を閉めた。壺は数秒カタカタと揺れてから蓋を開けた。中からはアイテムが飛び出てきた。

どうやらこの壺で生産をするようだ。でもその販売店では壺なんて売っていなかった。どこで手に入れるんだろう。

「あの、何かご用ですか？」

「へ？ ……あ」

いつの間にかこちらを向いていた彼女と目が合う。彼女は怪訝な顔をして俺を見つめている。

やばい。このままでは月見と同類（＝変態）だと思われる。

「いや、別に用はなくて……生産ってどうやるんだろうなあ」と見てただけです」

「ああ、そうでしたか」

彼女の表情がパツと明るくなる。変な人と思われていなかったことにほっとするが、こんなに簡単に人を信じて良いものなのかと、彼女のことが少しだけ心配になってしまった。

「簡単ですから、教えましょうか？」

「め、迷惑でなければ」

彼女はクスッと笑ってから「迷惑ではありませんよ」と言った。

「生産の仕方ですが、大きく分けて二通りあります。一つは様々な生産道具やギルドにある生産機器を使用して、いくつかの過程を経て生産する『高度生産』。もう一つは、この壺に材料を放り込むだけで生産できる『簡易生産』です。普通みなさんが『生産』というのは、大抵簡易生産のことを指します。もちろん二つにはそれぞれメリット、デメリットがあり、高度生産は生産する過程が多く時間がかかりますが、必要材料が少なくすんだり、生産者の力量によっては高ランクのアイテムが出来ることがあります。簡易生産は

短時間で簡単に生産ができますが、出来上がる物は常に一定で、高度生産のような高ランクのものが出来上がることはありません。このため、高度生産は装備品などを生産するときに、簡易生産はLV上げや材料を生産する際に使用されます。調合師はそのほとんどが消費アイテムなので、簡易生産をよく使うことになると思いますよ。もちろん高度生産をすれば使用する材料が減ったり、出来上がった時の個数が増えたりしますが……かかる時間を考えればあまり得ではありません」

一口に生産と言っても、そのやり方は二種類あるのか。さっき彼女がやっていたのが簡易生産というもので、おそらく桔梗が羊の肉を焼いて『マトンのグリル』を作っていたアレが高度生産なのだろう。

「そういうわけなので、簡易生産の仕方をお教えしますが、良いですかサイカさん？」

「はい。ぜひお願いします。朱莉さん」

軽く頭を下げる俺に、朱莉さんが優しく微笑みを浮かべる。

「試験管は装備しているようですね。ではその試験管を地面に落としてください」

「地面に落とすんですか？」

「はい」

ガラス製品を落とせと？ ああでもここは仮想現実だから割れる

ことはない……のか？

多少戸惑いつつも、言われたとおりに試験管を地面に落とす。

パリン。

割れた。

「えっと……割れたんですけど」

「はい。割れましたね」

やっぱり割れるのか！ ガラスは仮想現実バーチャルでも脆いのか！ とうか割れることを知ってて落とさせたのか！？

「安心してください。アイテムとしてはちゃんと存在してますから。それよりも、ほら、見てください」

朱莉さんに促されて視線を地面に向ける。

そこには割れた試験管が転がって……と思いきや、突然ポンツという音と共に小さな光を発し、その後壺が現れた。

「……あれ？」

それはさっき朱莉さんの足元にあった壺と同じ物だった。

「わたしも最初驚きました。本当に壊れてしまったのかと」

「まったく。知ってるなら先に言ってくれば良いのに」

「サイカさんにもわたしののように驚いて貰いたかったんです。ごめんなさい」

少し恥ずかしそうに頬を染めて謝る朱莉さんは、とても可愛く見えた。

……中の人は男かもしれないけど。俺のようになった。

「壺が現れたら、あとはこの中に生産したい物の材料を放り込んで、蓋を閉めて下さい」

壺の中に海水と水色の魔鉱石を放り込み、蓋をする。壺の口より大きな魔鉱石が入るのかと心配になったが、有名なおとぎ話のランプの精よろしく、魔鉱石はその大きさを縮めながら吸い込まれていた。

壺は数秒カタカタと揺れた後に蓋が勝手に開いた。中からはエイリアスが言っていたように、『塩』が出てきた。

「これで完成です。簡単でしょう？」

「はい。ありがとうございました」

お礼を言うと朱莉さんは「いえいえ」と微笑んだ。

それから、俺と朱莉さんは雑談を交えつつ、塩を生産し続けた。

調合師のLVが5になったところで朱莉さんに別れを告げてギルドを後にした。

大量に塩ができてしまった。どうしようこれ……。

そんなことを考えながら歩いていたときだった。

『すみません。大変お待たせしました』

以前に聞いたことのある声が頭の中に響いた。ログには『GM… テミス』とある。

『nNPCについてとありましたが、何かありましたか？』

『その、塩がですね』

『塩？』

『じゃなかったすみません！ 塩は関係ないです！』

どう処分しようか考えていたせいでまったく関係のない言葉が出てきてしまった。コホンと咳払いをして、一度仕切り直す。

『nNPCが関係あるのかどうかは分かりませんが……このゲームからログアウトできなくなるということはありますか？』

『ログアウトできなくなる、ですか？ ……100パーセントないとは言いませんが、ほぼありえないかと思います。VRゲームはその構造上、プレイヤーの神経と強くリンクする必要があります。それを確実に安全に切断できるよう、ログアウトのプログラムは入念に試験を繰り返して、何も問題がないことを確認しております。その証拠としまして、クローズドベータから今に至るまでにそのような報告は一度も受けておりません』

報告を受けていない……ということは、やはりログアウトできなくなっただけのようだ。

『もしかして、サイカさんがログアウトできなくなったのですか？』

『はあ、まあ……』

『そんなはずは……いや、nNPCは……まさか……』

テミスさんが一人ぶつぶつと呟いている。

『……少し調べてみます。また連絡しますので、そのときはお願いします』

『は、はい』

『それでは』

テルを終えて、耳から手を離す。

最後のテミスさんの急ぎよう……何か思い当たるふしでもあったのだろうか。

とにかく、また連絡すると言っていたから、ここは大人しく彼の連絡を待とう。

ふと思い出して時刻を確認する。あと10分で20時になろうとしている。

まっ、桔梗たちとLV上げでもして気を紛らわせますか。

それにしてもこの大量の塩はどうしよう……。

【サイカ】 種族…吸血鬼♀ クラス…ギャンブラーLV15

武器…片手剣LV10、短銃LV15 採集…採取LV1 生産…

調合師LV5

第3話 与えられた道 part 4

20時。俺達は時間通りに誰一人遅れることなく集まった。

「ルステイカーナの森の北東にあるルナの墓がLV15からは良いらしいです」

どこからか仕入れてきた千沙都の情報を頼りに、俺達はカメラアを出てルステイカーナの森を北東にあるというルナの墓へと向かった。

「もしや私達に追いつくためにソロ狩りしてたんですか？」

ルステイカーナの森を移動中、月見のLVが俺達と同じ15になっていることに気付いた桔梗が月見に尋ねた。

「ああ。これはチサー」

「こっそり一人で上げたですよー、月見さん？」

月見の言葉を遮って千沙都が言う。桔梗からは見えないが、パツと見た感じは笑顔の千沙都のこめかみあたりに青筋が浮かんでいる。

「お、おお……」

それに気付いている月見がぎこちなく頷く。

だめだこれ。完全に尻に敷かれるタイプだ。

「別にLV1くらい差でもなんでもないのに、そんなにLVが低いことが気になったですか？」

「あ、ああ。まあな」

「はあ、小さい大人です」

……まったくだ。

と、そんなことを話している間に『ルナの墓』にたどり着いた。

「さて、ここからはダンジョンなので、注意して進むですよ」

千沙都が盾と片手剣を構え、先陣を切って進む。その後を俺、桔

梗、月見の順で進む。見た目的には大柄な月見が先頭に立つべきなのだが、いかんせんプリーストなので打たれ弱い。おそらく本人的にも「俺が守ってやる！」と格好良いセリフでもはいて前を歩きたいだろうが、ここは大人しく後ろをついていくしかない。無謀にも前を歩いて死んでしまつては千沙都に後でなんと言われるか分からないからな。

……それすらも月見は喜びそうだが。

いくつかの敵を倒しながら進み、やがてとある広場へとたどり着く。

「ここが狩り場だそうです。初めてなので効率が良いかどうか分からないですが、まあやってみるです」

ふんつと気合いを入れた千沙都がブーメランを取り出して投げた。クルクルと回転しながら飛んでいき、ガンツとモンスターの頭に命中する。

「さあ、頑張つて経験値稼ぐですっ」

モンスターに挑発を発動し、盾を構え防御する。

こうして今日三度目のLV上げが始まった。

LV18になったところで時刻を確認すると23時を回っていたので、俺達は狩りを切り上げ街へ戻ることにした。

『ルナの墓』の狩り場はなかなか良かった。敵の湧く速さは早くもなく遅くもなく、強さもちょうど良い。ドロップアイテムも高値で売れるものをドロップするので財布にも嬉しい。

ただ一つ難点を上げるとすれば、それは敵がまたガイコツだったということだ。

今日はガイコツしかやってないような気がする。……あ、そういう羊もやったか。

「だゝ、つかれたあゝ」

城門を抜けたところで月見が地べたにゴロンと転がった。体が大きいせいでかなり邪魔だ。

「月見さんはキュアしてただけじゃないですか。何が『つかれた』ですか。疲れたのはこっちです。何回死にかけたと思ってるですか」
月見の腹をゲシゲシと蹴りつける千沙都。言葉とは裏腹にその表情には月見のような陰りは見えない。むしろ笑っているように見える。

「悪い悪い。でもよ、回復職なんて初めてだからいまいちやり方が分からなくてよ。あれでもかなーり頑張ったんだぜ？」

「それは今まで月見さんが回復職をしてこなかったのが悪いです。ほら、往来で寝転がるとみんなの迷惑です。早く立ち上がるです」

月見の脇腹に千沙都の足が突き刺さる。

「いて、いてて！　こら俺をサッカーボールみたいに蹴るな！」

「HP減ってないからその痛みは気のせいです。ほらほらっ」

千沙都がやけに嬉しそうに蹴りを繰り返す。

ふと視線を感じて周囲を見ると、行き交うプレイヤーが千沙都と月見を見てクスクスと笑っている。本人達はそれに気付いていない。……だまっておこう。

「ねえお兄ちゃん。私もちょっと腕が疲れてるような気がするんだけど、これって本当は体を動かして疲れてるわけじゃないんだよね？」

「ああ。動いているのは脳だけだからな。実際は勉強疲れみたいな脳の疲労しかないはずだ。たぶん月見も桔梗も、あまりにもこのゲームがリアル過ぎるせいで脳が体を動かしたと錯覚してしまっただけに疲れを感じさせているんじゃないか？」

「ふーん」

桔梗がおもむろに大斧を担ぎ、振り下ろす。

「ちよっ、ミナトあぶねーって！」

仰向けに転がっていた月見の顔の数センチ上で大斧の刃先が止まる。月見がそれに戦慄して目を見開き、喚いた。

「あ、すみません」

横目で月見を見ながら軽く謝り、すぐに俺に向き直る。

桔梗も月見の扱いはぞんざいなのか。

「凄いよね。本当に斧を振ったみたいな感覚があるなんて。現実で
斧なんて振ったことないけど」

「です。チサの足にも月見さんのお腹を蹴る感触がするです」

「イテ、いい加減やめろって！ イテテ！」

……月見の表情が嬉しそうなのは気のせいだろうか。

「ふあ……。あ、もうすぐで24時だ。そろそろ私は落ちるね」

「チサも月見さんを蹴り飽きたから落ちるです」

「え？ ……ゴホン。俺も落ちるわ」

「ああ。またな」

桔梗、千沙都がログアウトし、次いで「明日は仕事だからログインは夜になる」と言い残して月見がログアウトした。

『こんばんは。今よろしいでしょうか？』

3人を見送ってからギルドハウスで倉庫整理をしていると、GMのテミスからテルが入った。

『はい、大丈夫です』

さて、俺がログアウトできない原因を突き止められたのだろうか。『結果から申し上げます。誠に申し訳ありませんが、nNPCのプログラムの不具合により、現在サイカさんはログアウトできない状態となっております。また、この不具合は直ちに修正できないものとなっております』

『……そう、ですか』

ログアウトできない。しかも戻れないかもしれない。心の何処かでは思っていたことだが、いざその事実を告げられると、さすがに落胆を隠せない。いや、落胆するぐらいで留まっていられるのだから

ら、案外俺の心は強いのかもしれない。これ、酷い人だと泣き叫ぶぐらいしてるんじゃないか？

『ちなみに、一生ゲームの中ってわけじゃないですよ？ そのうちログアウトできるようにはなるんですよね？』

『……』

無言。ログアウトする方法は今のところ見つかっていない、というのか？

『現在プログラムの修正作業に着手しています。ただ、ある事情により作業は難航しております』

ある事情？ 一体なんだろう。

『……以降の話は他のプレイヤーの方々にお話にならないことをお約束ください。よろしいでしょうか？』

『……はい』

了承するしかない。しなければ話は進まないのだろう。

『このゲームは今まで我が社で運営してきたどのゲームとも異なったプログラムで運用されています。そのプログラムとは、とある海外の企業が開発した自立型高性能AIと呼ばれるものです。どのようなものか簡単に言えば、AIが人間の代わりにゲームを運営、管理し、不具合が見つければそれを即座に自動修正するというものです。これにより不具合修正などを一手にAI任せとし、人間の手間を省くことで、スタッフ陣は新要素の開発に注力でき、なおかつAIにより迅速に不具合に対処できるのです』

それは素晴らしい技術だ。不具合はたいいの場合プレイヤーに不利益を与える。今まではそれを人間の手で修正していたから、時によっては何ヶ月も放置されるような不具合もあった。それら全てをAIが立ち所に直すのだという。それが本当なら、プレイヤーは不具合に悩まされることなくゲームをプレイすることができ、運営側も新しい要素の開発に集中できる。どちら側にとってもいいことだらけだ。

『そのため、このゲームのほとんどがそのAIにより管理されてい

ます。……そして、今回は、そのAIに不具合が見つかったのです』
『なっ……。根本に不具合が！？ さっきはnNPCに不具合があったって言ったじゃないですか！？』

『はい、nNPCにも不具合がありました。しかしそれを辿っていけば、AIの不具合にたどり着いたのです』

AIの不具合に連鎖してnNPCにも不具合が起こり、ログアウト不能に繋がった、ということか。

『この不具合により、サイカさんがログアウトできなくなっただけでなく、ミッションも序盤以外が進行不可能となっています』

ミッション？ ログアウトと直接関係はなさそうなミッションにどうして不具合が発生したのだろう。

『実は、ミッションとAIは深くリンクしています。ミッションに登場するNPCが人間のように動くのはAIが制御しているからなのです。そして、それはサイカさんの操作するnNPCも例外ではありません』

そうか。nNPCはミッションに深く関わっている。AIもミッションと深く繋がっている。nNPCとAIとの接点はそこか。

しばしの沈黙。テミスさんは重々しく口を開いた。

『……サイカさんがログアウトできるようになるには、方法が一つだけあります』

言いにくそうに言葉を紡ぐ様子に、自然と心拍数が上がる。

『nNPCのサイカさんの手で、進行不可能となったミッションを修正、クリアし、そして最後に待つボスを倒し、全てのミッションをクリアしてください』

『ミッションをクリア？ そ、それはどういうことですか？』

俺が進行不可能となったミッションを進める？ しかもクリアしろ？ 一体それでどうして俺がログアウトできるようになるんだ？

『nNPCであるあなたであれば、進行不可能となったミッションを唯一進めることができるのです。そしてミッションの最後に待つボスは、AIと最も強くリンクしています。それを倒すことが出来

れば、あなたとAIとの繋がりが弱まり、その隙を突いてあなたをログアウトさせることが可能となります』

……理屈はなんとなくわかった。だが、

『だったら他の国のnNPCを使ってミッションをクリアすればいいんじゃないですか？ 他のnNPCはバイトか社員が操作してるんですよね？』

『残念ながら、他の国には元々最後までミッションを実装していないのです。カメラアだけ唯一実験的に実装しているのです』

それはつまり、AIと強く繋がっている最後のボスを倒すには、カメラアのnNPCである俺がやらないといけない、ということか。『本当に申し訳ありません。私も全力であなたのサポートをいたしますので……』

言いたいことは山ほどある。けれど、この人一人が悪いというわけじゃない。誰だって初めては失敗する。上手くいくことなんてそうそうないんだ。

そうだ。逆に考えれば良い。被害が俺だけで済んで良かったと。このゲームを楽しみにしていた桔梗や千沙都が被害を受けなくて済んで良かったと。二人の悲しむ顔を見なくて済んで良かったと。

『まあ、やるしかありませんよね』

苦笑しながらそう言い放つと、テミスさんはもう一度謝罪を口にした。

そう、やるしかないんだ。だったらグダグダ言わずにやるしかない。

『無事ログアウトできたら、正式サービスの月額料金、値下げしてくださいよ？』

そう言って、ぎこちないながらも俺は笑ってみせた。

【サイカ】 種族…吸血鬼♀ クラス…ギャンブラーLV18

武器：片手剣LV15、短銃LV18
採集：採取LV1
生産：
調合師LV5

第4話 ギャンブラー part 1

『ミッション進行については、私どもの準備が済み次第、追って連絡を致します』

そう言ってテミスさんとの話を終えた日から一週間。世界は何事もなく平和に過ぎ去っていった。

俺がログアウトできないことを除いては。

頭の中で電子音が鳴り響く。目覚ましよりも強烈なそれに絶えきれず目を覚ました俺は、体を仰向けにしてメニュー画面を開き、アラームを解除する。

「ん……」

現実と変わらない朝の目覚め。ただし違うのは、目覚ましのアラームを切ると聞こえたのが、小鳥のさえずりではなく、心を落ち着かせる音楽だったことだ。

ここはゲームの中の世界。音楽が流れていて当たり前なのだ、

「ふぁ……はぁ」

ベッドから上半身を起こし、伸びをする。

いや〜よく寝た。このベッドをテミスさんから貰って正解だった。

『何か必要な物はありませんか？』

別れ際にそう言ったテミスさんに、俺はしばし考えた末に、

『ふかふかのベッドがほしい』

と応えた。

『分かりました』

と応えるテミスさんを見送ったその翌日には、俺の元にテミスさ

んからロイヤルベッドなるアイテムが送られてきた。

名前通りヨーロッパの皇室で使われていそうな天蓋付きてんがいのキングサイズのベッドは、それだけでギルドハウスの半分の面積を埋めてしまった。ギルドハウスに設置する家具には、休憩した際のステータスアップの効果の他に、倉庫の拡張効果もある。このロイヤルベッドは6段階あるレア度の中の4という序盤にしては結構レアな家具らしく、それ相応の効果として、このベッドで休憩すると全てのステータスがアップするという素晴らしい性能を持っている。ただ問題なのが、このロイヤルベッドには倉庫拡張効果はまったくないということだ。

寝心地良いから倉庫については妥協している。

バザー広場の露天で買った壁掛け鏡を覗く。起きたばかりだというのに寝癖が一つもないどころか、その顔はすでに化粧を済ませているかのように綺麗に整っている。

Yシャツの胸元を引っ張って鼻をくっつけて匂いを嗅ぐ。数日間一部も風呂に入っていないというのに、服からは変な臭いどころか、むしろ甘い良い匂いがした。いくらこのゲームがリアルだからといっても、寝癖やら衣服の汚れやら体臭やらまでは再現していないようだ。

同様に服を着たまま寝た際の寝苦しさも再現されていないようで、コートやブーツを履いたままベッドで寝ても何ら寝苦しさは感じないのだが、『服や靴を履いたまま寝る』ということ自体に違和感を覚えた俺は、一昨日露天でアルビオシャツという、何故かアルビオ以外も装備可能な大きなYシャツを買って、それを寝間着としていた。一応寝間着も探したが、そういった装備はなかったのだ。

ちなみにアルビオシャツを着ても下着は見えないようになってい。上の方のボタンを外しているので胸はチラッとだけ見える。まったくざんね……いやいや、健全な全年齢対応ゲームだ。

アルビオシャツを脱いでコートとハーフパンツを履く。ステータスウィンドウから装備を切り替えても良いのだが、いちいちステータスウィンドウを開くのが面倒なので、最近^{リアル}は現実と同じようにして着替えている。シャツを脱いだ瞬間色気のないインナーに変わったことにすこしだけがっかりしながら着替えを済ませる。

最後に短銃と片手剣をベルトホルダーに収めて、ギルドハウスを出た。

夏休みということもあってか、まだ朝の8時過ぎだというのに、バザー広場は人で溢れていた。出身国として選べる三国のうちで最も人の少ないカメラリアでこれなのだ。ルノンクールやリウスヴァラはこれ以上の賑わいなのだろう。

露天を見て回りながら目当ての物を探す。

今日の目当ては短銃だ。初日に買い換えて以来、ずっと同じ短銃を使用してきたのだが、さすがにLV27にもなってLV10の武器を使い続けるのはつきようになってきた。といってもLV上げは基本桔梗、千沙都、月見の3人と一緒にやることになっているので、桔梗と千沙都の火力で十分事足りている。短銃は専らソロ用にほしいのだ。

ちなみに今探している短銃は、短銃の中でも『魔法銃』と呼ばれる物で、火や風などの属性の追加効果のある特殊な弾丸を使用することができる短銃だ。掲示板の噂では、その属性効果とギャンブラーの支援効果が合わさると、アーチャー以上のダメージをたたき出せるとかなんとか。そんなことを耳にしては試さずにいられるわけもなく、しかも弾の方は昨日知り合いからレシピ教えて貰い、すでに手元にあったので、せめて試し打ちだけでもと、朝からこうやって魔法銃を探しに来たというわけだ。

昨日、いつものように調合師ギルドでせっせと塩を大量生産していたところ、朱莉さんが扉を大きく開け放ちながら走り込んできた。「サイカさん、サイカさんっ」

「ん？　どうかした？」

鞆一杯の塩をNPCに投げ売りながら朱莉さんに気のない返事をする。ここ最近毎日のように会って話をするので、自然と喋り方が砕けたものになっていた。もちろん初日に忘れていたフレンド登録も済ませてある。

『新しい弾丸のレシピを入手しましたっ』

『本当かっ？』

周りに聞かれないようテルで伝えてきた内容に、俺は少なからず驚いてショッップウィンドウを閉じ、朱莉をまじまじと見つめる。

弾丸のレシピは今のところ、銅の弾丸、鉄の弾丸、鋼の弾丸しか見つかっていない。この3つは銅、鉄、鋼の順番に攻撃力が上がるのだが、それ以上の上げ幅で値段が上がるので、未だに俺は銅の弾丸を使用していた。そのため、もっと安上がりになれる他の弾丸はないものかと探していたのだ。

R Fのアイテムデータを解析したプレイヤーの書き込みによると、弾丸には他にもいくつかの種類があり、例えば相手を気絶させる『気絶の弾丸』や、対象の動きを遅くする『鈍足の弾丸』や、スチールよりも攻撃力が上の『金の弾丸』や『銀の弾丸』などがあるらしい。

『それで何ていう弾丸のレシピを見つけたんだ？』

先を促すように朱莉さんに尋ねる。

『属性弾です』

『おお。それほしかったんだよな』

鉄や鋼の弾丸よりも攻撃力が高いと噂の属性弾は、もしかすると鉄や鋼の弾丸よりも安く生産できるかもしれないと、俺も今までい

ろいろな材料を試して生産してみようとしたが、どれもこれも外れで、一向に属性弾のレシピが判明することはなかった。

『一応一通り材料はためしたんだけどな……一体何が悪かったんだ？』

『えっと、魔鉱石で属性が変わるのは合っていました。ただ、爆薬が間違っていたんです。爆薬は鉱物系弾丸と状態異常系の弾丸にしか使えないみたいです』

爆薬が間違い？ それは盲点だった。絶対、魔鉱石と爆薬と、あと一つ、スチールやアイアンに変わる何かで属性弾ができると思っていたのに。

『属性弾のレシピは、各属性の魔鉱石2つと、骨くず2つです』

『骨くず……だと……？』

まさかの骨くず。売りに良し、細工師のLV上げに良し、それに加えて属性弾のレシピだなんて、骨くず万能だな。

『はい。まさか骨くずだけでいいなんて思いませんでした』

『しかも何気に魔鉱石2つか。今までどの生産もずっと1つだったから、ここも盲点だったな』

これは見つからないわけだ。けれど、この材料なら鉄や鋼の弾丸よりもずっと安く生産できる。

『とにかく生産してみましようか。サイカさん骨くずありますか？』

『売る用にとっておいてあるのが10ダースほど倉庫に』

『……相変わらず不死系のモンスターばかり狩っているんですね』

『チサ——ラウンダーが毎回良い狩り場教えてくれるんだけど、毎回決まって骨なんだよなあ……』

『骨』とはガイコツが鎧やら武器を装備したモンスターのことだ。この一週間、モンスターは骨しか見ていない気がする。

『たしかに骨はドロップアイテムの骨くずは高く売れて、経験値も良くて、動きも遅いから楽に倒せてと、良いモンスターですよ。見た目がちょっと怖いですけど』

『本当の白骨死体が動いてるように見えるからな……とくにLV

25あたりから上の骨は……』

L V 25以上の骨はそれまでと違って頭部をブーメランのように投げる攻撃パターンが追加されている。あれが意外にも怖くて、狩り場が大抵墓地ということもあり、恐がりな桔梗は骨の頭が飛ぶ度に「ひい」と小さく悲鳴を上げている。

『ああ、あれは怖いですね……っと、話が脱線してしまいました。ここで生産するとレシピがばれかねませんので、どこか人の少ないところで生産してみましょうか』

『分かった。じゃあ骨くず取ってくるから、ちよつと待っていてくれ』

と、いうことで属性弾を生産することに成功した俺だが、この属性弾、なんと普通の短銃では使用不可能だったのだ。属性弾の説明を見ると、『魔法銃専用』と書かれていた。弾自体が安く作れるから何かあるとは思っていたが……まさか武器指定とは。

それでも、せっかく生産したし、しかもアーチャー並みの火力を出せるとあって、なんとしても魔法銃を手に入れたいところなのだが……なかなか見つからない。

元々そう簡単に見つかるとは思っていないが、実際本当に見つからないと、「ギャンブラーって人気がないんだな」とつくづく思われる。

戦略掲示板を見たところ、支援職として優秀なのはミンストレルらしい。ミンストレルの歌の効果は多種にわたり、それに比べてギャンブラーの支援効果はステータスアップ系の少数。しかも歌は効果が一定なのに対し、ギャンブラーのツープアップの効果は上下する。また、ミンストレルは回復もできるので、サブ回復職としても活躍できる支援のエキスパートだ。そりゃ攻撃職やら盾職からすれば、攻撃よりの中途半端な支援職のギャンブラーより、完全支援系なミンストレルが良いだろう。

まあいいけどね。俺はギャンブラー楽しんでるし。装備探すの面倒だけど。

「……ん？」

そのとき、目の前の露天に見慣れない短銃を見つけた。
もしかするともしかするかも？

淡い期待を胸に、俺はその露天へと向かった。

【サイカ】種族…吸血鬼♀ クラス…ギャンブラーLV27
武器…片手剣LV23、短銃LV27 採集…採取LV1 生産…
調合師LV21

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6577y/>

Re:FRain Online

2011年12月3日17時08分発行